岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 61

高　本　遺　跡

昭和59年度圃場整備に
伴う確認調査

1985年3月

岡山県教育委員会

序

岡山県は豊かな自然環境に恵まれ、古くから人々の営みがみられ、また、特色ある輝やかしい文化が栄えたところでもあります。このため多くの埋蔵文化財が包蔵されていますが最近、社会経済のめざましい発展に伴い各種開発事業が増大し、文化財の保護・保存上いろいろな問題が生じております。この、高本遺跡の発掘調査は昭和59年度国庫補助を得て開発との調整を図り、保護・保存の資料を得ることを目的として実施したものであります。

高本遺跡は、昭和47年・48年度の調査（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査）により、遺跡の一部が明らかにされておりますが、今回は前回の調査地区の北側にあたる丘陵斜面が圃場整備事業の予定地となりこれに先だって、調査を実施したものであります。

発掘調査の結果、高本遺跡では弥生時代中期から奈良時代までの集落址・建物群を確認することができました。この内建物群につきましては英田郡衙に関連した遺構と推定され、各方面から注目されております。

この報告書は、今回の調査結果をまとめたものであり、前回の調査結果に加え今後の埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、地域の歴史を研究するうえでの資料として役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査にあたりましては岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、作東町、作東町教育委員会、作東町文化財保護委員、地権者等関係各位から多大な御指導と御協力を賜りました。また、地元の方々には炎暑のなか発掘作業に従事していただきました。あわせて厚く御礼申し上げます。

昭和60年３月

岡山県教育委員会
教育長　宮　地　暢　夫

例　　言

1. 本書は岡山県教育委員会が昭和59年度国庫補助を受けて実施した「高本（こうもと）遺跡」の発掘調査概要報告書である。
2. 遺跡は英田郡作東町川北高本に所在する。
3. 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員（当時文化課職員）二宮治夫、松本和男、及び文化課職員岡田博が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和59年５月４日から昭和59年９月１日まで実施した。
4. 発掘調査は作東町教育委員会、町文化財保護委員、地権者等関係各位より多大なる援助を受けた。特に発掘作業に従事していただいた地区有志の方々には大変お世話になりました。記して感謝の意を表します。
5. 遺物の整理は岡山県古代吉備文化財センターで行った。なお、遺物・実測図・写真等は文化財センター（岡山市西花尻1325－３）において保管している。
6. 本報告書の執筆は河本清・松本・岡田・二宮、編集は二宮が行った。調査においては、文化財センター職員（当時文化課分室職員）井上弘・柳瀬昭彦・高畑知功・平井勝・岡本寛久・江見正已・平井泰男・楢原充二、文化課職員河本清・遠藤勇次・光永真一、さらに武田恭彰の協力を得た。遺物の実測および浄写に竹本聡美・山田雅子・岡本香織・伊木明子、遺物の写真撮影は井上、遺物整理には森本耶須子・平岩章子氏の協力を得た。
7. 本書に使用した高度値は海抜高であり、方位は第１～２図が真北、他は磁北である。
8. 本書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。出土遺物の実測図で数値を示していないものは、１／４の縮尺である。
9. 本書第２図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（林野・真加部）を複製したものである。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境……7
第２章　調査の経緯……9
　第１節　遺跡の位置と現状……9
　第２節　調査に至るに経過……9
　第３節　調査の方法と経過……11
第３章　調査の概要……13
　１．トレンチ調査の概要……13
　２．ＫＩ区竪穴式住居……22
　３．土壙……27
　４．ＫⅡ区……29
　５．ＫⅢ区……30
　６．ＫⅣ区……33
　(1)　竪穴式住居……34
　(2)　竪穴式住居……35
　７．建物……37
　(1)　建物－１……37
　(2)　建物－２……37
　(3)　建物－３……40
　(4)　建物－４……40
　(5)　建物－５……41
　(6)　建物－６……43
　(7)　建物－７……43
　(8)　建物－８……44
　(9)　建物－９……44
　(10)　建物－10……44
　(11)　建物－11……46
　(12)　建物－12……46
　(13)　建物－13……48
　８．ＫＶ区……50
　(1)　建物－14……51
　(2)　建物－15……51
　９．ＫⅥ区……52
　土壙・柱穴列……52
　10．ＫⅦ区……54
　(1)　溝……54
　(2)　建物－16……54
　11．ＫⅧ区……55
　12．ＫⅨ区……56
　(1)　建物－17……56

(2) 建物－18……56
第４章　まとめ……57

図　目　次

第１図　遺跡位置図……7
第２図　周辺遺跡地図（１／25,000）……8
第３図　トレンチ設定図（１／2,000）…13
第４図　トレンチ平・土層断面図(1／80)‥15
第５図　トレンチ土層断面図(1／80)‥‥16
第６図　トレンチ土層断面図(1／80)‥‥17
第７図　トレンチ土層断面図(1／80)‥‥18
第８図　トレンチ出土遺物（１）……19
第９図　トレンチ出土遺物（２）……20
第10図　トレンチ・包含層出土遺物(3)‥‥21
第11図　遺構全体図(1／500)折り込み……
第12図　ＫＩA・B区遺構全体図(1／300)‥23
第13図　竪穴式住居第１群（１／80）‥‥24
第14図　竪穴式住居第２群（１／80）‥‥24
第15図　竪穴式住居第３群（１／80）‥‥25
第16図　竪穴式住居出土遺物……25
第17図　竪穴式住居・etc出土遺物……26
第18図　ＫＩA土壙－１（１／40）……27
第19図　ＫＩA土壙－２（１／40）……27
第20図　ＫＩA土壙－３（１／40）……28
第21図　ＫＩA土壙－４（１／40）……28
第22図　ＫⅡ北壁土層断面（１／60）‥‥29
第23図　ＫⅢ区遺構全体図（１／300）…30
第24図　竪穴式住居（１／80）……30
第25図　炉（１／30）……31
第26図　土壙土層断面（１／80）……32
第27図　不明土壙（１／80）……32
第28図　KⅣA・B区遺構全体図(1／300)‥33
第29図　KⅥA竪穴式住居（１／60）‥‥34
第30図　KⅥA竪穴式住居（１／120）‥‥36
第31図　建物配置図(1／1,000)折り込み‥‥
第32図　ＫＩA建物－１（１／100）……38
第33図　ＫＩA建物－２（１／100）……39
第34図　ＫＩA建物－３（１／100）……40
第35図　ＫＩB建物－４（１／100）……40
第36図　KⅥA建物－５（１／100）……41
第37図　KⅥA建物－６（１／100）……42
第38図　KⅥA建物－７（１／100）……43
第39図　KⅥA・B建物－８（１／100）…44
第40図　KⅣB建物－9(1／100)・出土遺物45
第41図　KⅥB建物－10（１／100）……46
第42図　KⅥB建物－11（１／100）……47
第43図　KⅥB建物－12（１／100）……47
第44図　KⅢ・ⅥB建物－13(１／100)‥48
第45図　建物柱穴出土遺物（１）……49
第46図　ＫＶ区遺構全体図(１／30)……50
第47図　ＫＶ建物－14（１／100）……50
第48図　ＫＶ建物－15（１／100）……51
第49図　KⅣ区遺構全体図(１／300)‥‥52
第50図　KⅣ土壙－１（１／40）……52
第51図　KⅦ区遺構体体図(１／300)‥‥53
第52図　KⅦ溝断面図（１／40）遺物‥‥53
第53図　KⅦ建物－16（１／100）……54
第54図　KⅧ区遺構全体図(１／300)‥‥55
第55図　北壁土層断面……55
第56図　KⅨ建物－17（１／100）……56
第57図　KⅨ建物－18（１／100）……56

表　目　次

表－１　建物一覧表……58

図　版　目　次

図版１　１．遺跡遠景（南東山腹から）
　　２．遺跡遠景（北東から）
図版２　１．発掘調査前全景（北西丘陵上から）
　　２．発掘調査後全景（北西丘陵上から）
図版３　１．Ｔ－１（北東から）
　　２．Ｔ－１内土壙（南西から）
　　３．Ｔ－３（南々東から）
　　４．Ｔ－８（南東から）
　　５．Ｔ－６西壁（南東から）
　　６．Ｔ－６北壁（南から）
　　７．Ｔ－27（南々西から）
　　８．ＫⅡ北壁（南西から）
図版４　１．ＫⅠA竪穴式住居第１群検出（東から）
　　２．ＫⅠA竪穴式住居第１群完掘（東から）
図版５　１．ＫⅠA竪穴式住居第２群検出（北東から）
　　２．ＫⅠA竪穴式住居第２群完掘（南西から）
図版６　１．ＫⅠB竪穴式住居第３群全景（東から）
　　2.～5．ＫⅠ竪穴式住居群ピット
図版７　１．ＫⅠA土壙－１断面（南東から）
　　２．ＫⅠA土壙－２完掘（南から）
図版８　１．ＫⅠA・B全景（南東から）
　　２．ＫⅠA建物－1・2全景（南から）
図版９　１．ＫⅠA建物－１（南東から）
　　２．ＫⅠA建物－２（南から）
図版10　ＫⅠA建物－１柱穴断面
図面11　１．ＫⅠA建物－３（北から）
　　２．ＫⅠB建物－４（東から）
図版12　ＫⅠA建物－２・３柱穴断面
図版13　１．ＫⅢ竪穴式住居（南東から）
　　２．ＫⅢ溝－３（北西から）
図版14　１．炉
　　2・3．埋土断面
　　4・5．焼土断面
図版15　ＫⅢ土壙北西壁断面
図面16　１．ＫⅢ・ⅥB不明土壙検出状況（南西から）
　　２．建物－13・不明土壙掘り上げ後（南から）
図版17　１．ＫⅣA竪穴式住居（北西から）
　　２．ＫⅣA竪穴式住居・ⅥB建物－９（北から）
図版18　１．ＫⅣA・B建物－５～11全景（北から）
　　２．ＫⅣA・B建物－５～11全景（南西から）
図版19　１．ＫⅣB建物－９（南西から）
　　２．ＫⅣB建物－９・10（南西から）
図版20　ＫⅥA・B建物－6・8・9柱穴断面
図版21　１．ＫⅣB建物－11（南西から）
　　２．ＫⅣB建物－12（南から）
　　３．ＫⅢ・ⅣA・B建物全景（南西から）
図版22　１．ＫⅤ全景（北西から）
　　２．ＫⅤ建物－14（北西から）
　　３．ＫⅤ建物－15（北から）
図版23　ＫⅤ建物－14柱穴断面
図版24　１．ＫⅥ全景（北西から）
　　２．ＫⅥ土壙半掘（南西から）
図版25　１．ＫⅦ全景（南西から）
　　２．建物－16（北西から）
図版26　竪穴式住居第３群・ＫⅢトレンチ・建物柱穴・柱穴・表採遺物
図版27　ＫⅦ溝・Ｔ－27・表採遺物
図版28　Ｔ－８・Ｔ－16(1)・Ｔ－18出土遺物

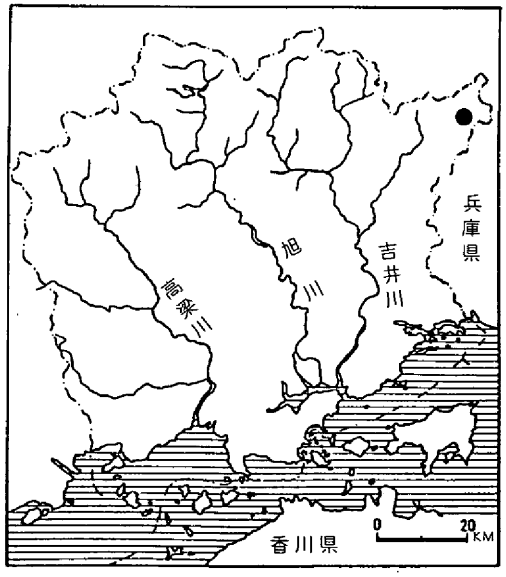
第１章　地理的・歴史的環境

英田郡作東町川北字高本に所在する高本遺跡は、周囲を標高300ｍ前後の丘陵に囲まれ、その丘陵の間を吉野川が貫流している。その吉野川、および支流に沿って帯状に平地は展開している。その平地は、江見付近でやや広がりを見せてくる。このような地域にあって高本遺跡は、吉野川の西岸にあって、その平地を望む台地上に位置する。作東町（江見）は、姫路から米子に通ずる国道179号線（出雲往来）と、鳥取に通ずる道路（因幡往来）との交通の分岐点でもあるとともに、出雲往来は、後醍醐天皇配流伝説等からみてもその交通路は頻繁に利用されたものであり、その時期は古くまでさかのぼるものと思われる。古墳時代になると数多くの古墳が各水系、平野を見おろす低丘陵上に認められるようになるのが一般的であるが、作東町内ではその数は極めて少なく、低丘陵上に３～４ケ所の古墳群が知られているのみである。しかし、充分な遺跡分布調査が行われていないがためこの時期の遺跡が少ない。しかし、今後はさらに増加していくことが予想される。さらに、奈良時代の寺院址は作東町内に４ケ所知られている（江見〔閤武〕廃寺・竹田廃寺・大海廃寺・土居廃寺）こと、とりわけ江見（閤武）廃寺は当遺跡の北東約300ｍに確認されている。また現地には長径195㎝、短径170㎝を測る礎石が現存している。その他の廃寺においても奈良あるいは平安時代の遺物が出土している。

高本遺跡においては、前回（昭和47・48年の縦貫道の調査[註1]）の調査で墨書土器、ならびに陶硯が出土していることから、今回の調査地域が英田郡衙の可能性を一層深めることとなった。

また、『霊異記』においてみられるように、奈良時代以降は鉄の生産地としても著名な地域であるように記載されていることから、製鉄に関連した遺構が確認されることが予想される。

このように高本遺跡が所在する作東町は美作国における極めて重要な位置をしめているものと考えられる。

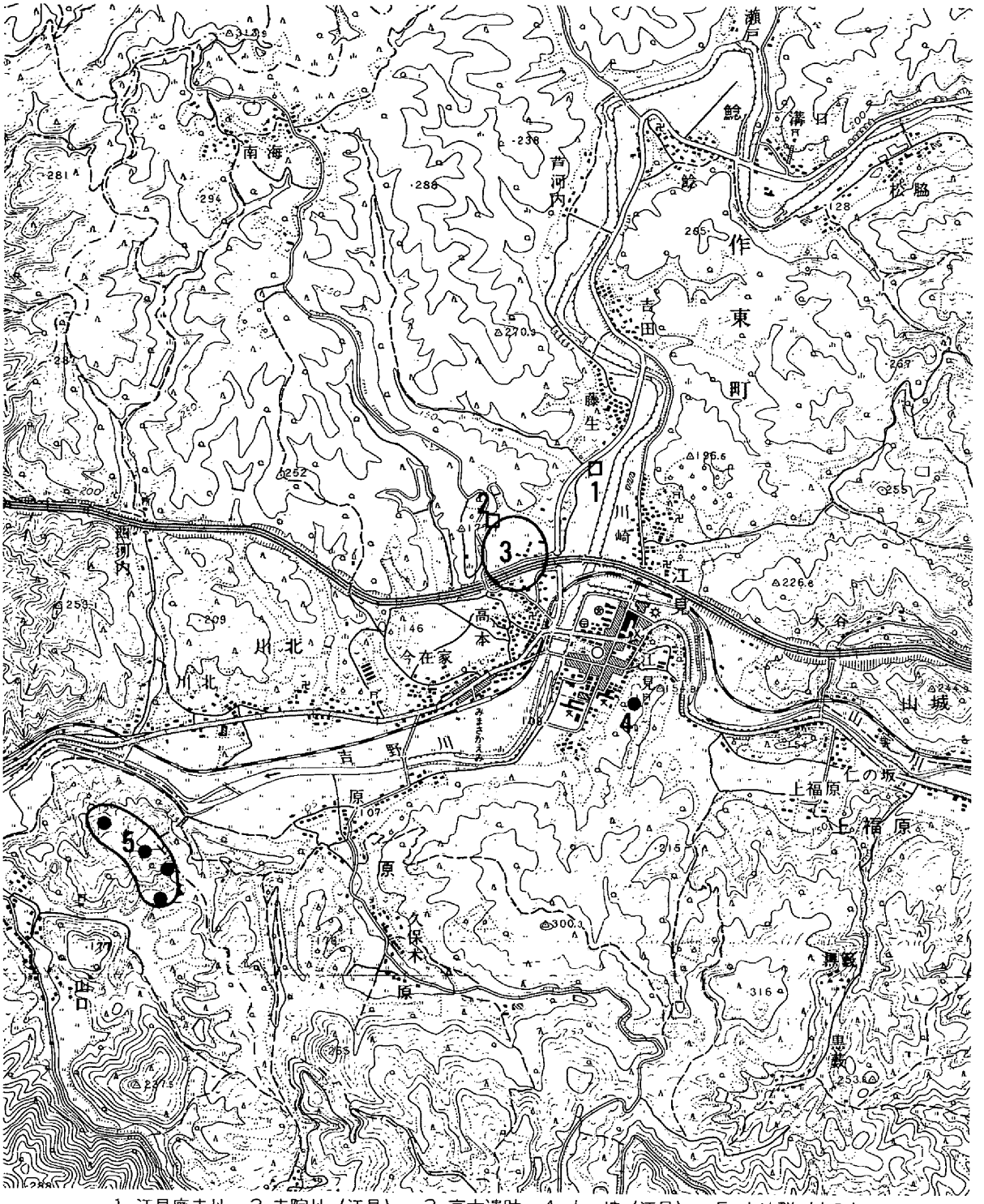


第１図　遺跡位置図

註１

井上弘・山磨康平・岡田博『高本遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８

岡山県教育委員会　1975年



1.江見廃寺址　2.寺院址（江見）　3.高本遺跡　4.古　墳（江見）　5.古墳群（山口）

第2図　周辺遺跡地図（1／25,000）

第2章　調 査 の 経 緯

第1節　遺跡の位置と現状

高本遺跡は英田郡作東町川北字高本に所在する。中国山地に源を発し、吉井川に注ぐ支流の吉野川中流域に位置している本遺跡は、吉野川によって形成された小さな沖積地を見おろす標高130m～135m 位の北西から南東に伸びた舌状の丘陵上に立地する遺跡である。この丘陵上は現在まで数回の整備が行われ、そのたびに遺構もかなり消滅されている。遺跡の立地していた丘陵上は当初南東向きのゆるやかな斜面であって、この斜面を利用して畑作（薬草、とりわけ高麗人参等）を耕作していたものである（調査進行中に丘陵上に縦横に走った畝溝が検出されたことと、地権者の話にもとづく）。このような斜面を整備して現在の水田に変化させたのは昭和になってからであり、それも数回行われている。

なお、遺跡の立地する大部分は水田であり、冬期は野菜も作付けされていた部分もあったようである。さらに、一部分の水田においては、古くから瓦粘土の採掘地として利用されていることも明らかになっている。現在においては、瓦製作が他の地域の瓦製造業者におされ、すたれ消滅している。よって遺跡地一帯はその後、このような採掘等がなされなくなり、現在の水田として存在していたものである。

第2節　調査に至る経過

高本遺跡は昭和47・48年度の中国縦貫自動車道建設に伴う事前の発掘調査によって弥生時代中期と奈良時代の建物群を主体とした複合遺跡であることが判明した。中でも倉庫群を中心とする奈良時代の掘立柱建物群は墨書須恵器ともあわせて、美作国英田郡の郡衙の倉院と推定されたところである。

この高本遺跡に続く北側の谷水田一帯が「土地改良総合整備事業」として圃場整備が計画されていることを知らされたのは昭和58年10月である。このため、県文化課、町役場、町教育委員会の三者で急拠現地踏査を行い、工事範囲、内容等についての協議を行った。その結果、本遺跡は土地改良事業の計画範囲内であり、しかも、工事は昭和59年度に通年施工として、実施しようとするものであることもこの時点で知ったのである。このため早急に遺跡の規模等を確認し工事との調整を講じる必要が生じたため県教育委員会では昭和59年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することとなったのである。

昭和59年４月に至り地元において地権者代表、町教育委員会、県文化課の三者は発掘調査についての具体的な打合せ会を開く。

こうした諸準備をふまえて昭和59年５月４日資材を搬入し、５月７日発掘調査を開始したのである。

調査体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校

岡山県教育庁文化課

松元昭憲　課長

逸見英邦　課長代理

河本　清　課長補佐

遠藤勇次　主任

松本和男　文化財保護主査（調査担当）

岡田　博　文化財保護主査（調査担当）

高畑知功　文化財保護主査

二宮治夫　文化財保護主査（調査担当）

光永真一　文化財保護主事

発掘調査を実施するにあたっては、調査期間、調査実施計画等において種々の困難な問題があった。調査を行うことについては、それらの問題が全て解決したわけではなく、困難な問題を伴いながら調査を実施し、昭和59年９月１日で、一応終了した。

発掘調査を実施するにあたっては、町ならびに地権者の方々の御協力を得た。特に猛暑の中で発掘調査に従事していただいた地元有志の方々には記して感謝の意を表します。

作業員名（敬称略）

岡　毅・久保正重・宰務正一・前原四郎・光本水雄・国貞圭也

宰務とめ・広瀬隆子・前原芙美子・安本綾野・安本せつ子・安本ふぐり・安本雪子

第３節　調査の方法と経過

高本遺跡の調査は昭和59年５月４日よりトレンチ調査により遺構の確認調査を開始することから始めた。まず前回（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査）調査からして、丘陵部分を中心に行った。その結果、丘陵部からは多数の柱穴、溝（近代の畑作の時のもの）が検出された。トレンチ調査の結果、現状から遺構に達する削平がなされる地区について調査が必要となった。その調査必要面積は4,000㎡あり、期間等から計算して人力では不可能であり重機による掘削（表土除去）方法に切り変える。重機（ユンボ）による掘削は昭和59年７月13日から開始し、それと同時に調査員（松本和男・岡田博）の増員もなされた。

まず丘陵上の遺構密度の高い地区から開始し、その順序はＫＩB ・ＫＩA ・ＫⅡ・ＫⅢ・ＫⅣA ・ＫⅣB ・ＫＶ・ＫⅥ・ＫⅦ・ＫⅧで行われた。

表土（耕作土・造成土を含む）除去後、トレンチ調査の結果通りに多数の遺構を検出することができた。検出された遺構は多数のため、調査に時間がかかり、調査はおもうように進行しない。このような事態になり、期日も近づきつつあるため、調査員の援助を受けた。

以上のようにして、遺構は全掘あるいは半掘の状態で調査を昭和59年９月１日をもって終了した。

その後昭和59年９月26日地元地権者からの連絡でＫＩA の上段およびＫⅣA・B の下段が計画変更のため削平をうけて、遺構が検出されているとのことで現地に出向く。現地ではＫＩの上段では数個の柱穴および炭・焼土部分が認められたため、現時点で盛り土により保存するようにした。ＫⅣA 下段については約１ｍ位の削平を受けているため遺構の存在はなかった。ＫⅣB 下段については、削平がわずかであったため建物が検出された。規模はいずれも２間×数間のものである（ＫⅨ）。この地区については昭和59年10月８日に遺構の実測・写真撮影を行ない埋めもどし、保存処置をとった。

日　誌　抄

昭和59年

５月４日(金)　発掘器材の運般、遠景写真撮影

５月７日(月)　高本遺跡へトレンチ設定、Ｔ－１掘り下げ開始

８日(火)～９日(水)　Ｔ－２・３掘り下げ、柱穴の一段掘り、写真撮影

10日(木)～11日(金)　Ｔ－７～10掘り下げ、Ｔ－１・２断面実測、写真撮影

14日(月)～16日(水)　Ｔ－５・８・14掘り下げ、Ｔ－３・７・９写真撮影・断面実測、Ｔ－８遺構検出作業

17日(木)～18日(金)　Ｔ－４・５・14・15掘り下げ、遺構検出作業

21日(月)～23日(水)　Ｔ－19・17・18・20・21掘り下げ、遺構検出・Ｔ－４・５・17・18写真撮影、トレンチ設定、作東町文化財保護委員現地視察。

24日(木)～25日(金)　Ｔ－15・24・19掘り下げ、Ｔ－４・５・14写真撮影、断面実測

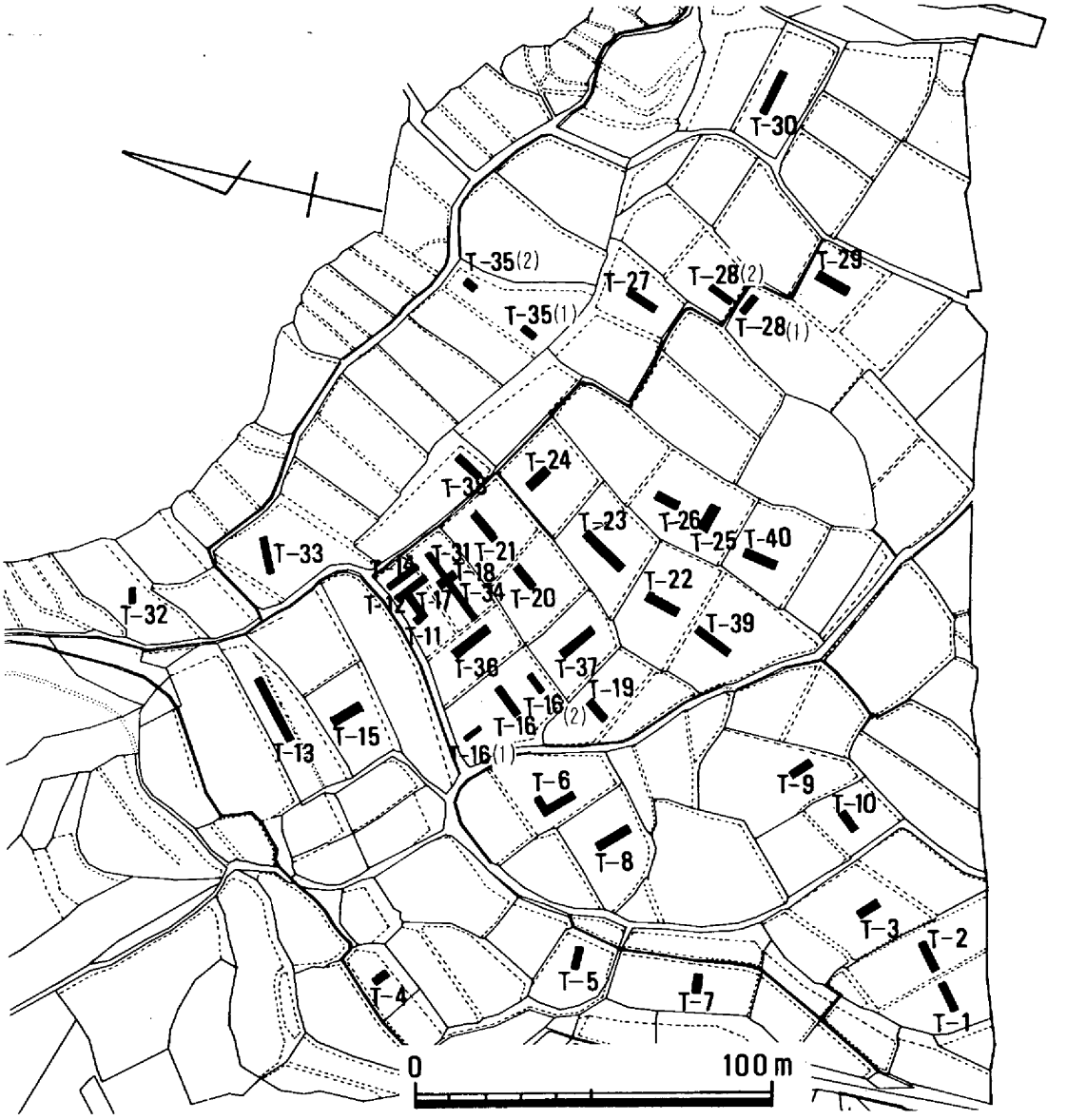
28日(月)～30日(火)　Ｔ－22・23・25・26・28・29・

32・33・35(1)(2)掘り下げ、T－1・3・17・24平板実測、断面実測
6月4日(月)～6日(水)　T－28(1)(2)・29・30掘り下げ、断面実測、写真撮影、トレンチ配置図作成
7日(木)　T－30掘り下げ、T－17・24ピット掘り下げ
13日(水)　トレンチ内平面図作成
14日(木)　図面整理
15日(金)～16日(土)　T－21・27清掃・写真撮影・平面図作成、町教育委員会職員見学
18日(月)～20日(水)　T－12・25・26・36・37掘り下げ、T－22・23・25・26遺構検出・一段掘り、清掃・写真撮影
21日(木)～23日(土)　T－12・18・36掘り下げ、清掃・写真撮影、T－36近代溝掘り上げ、T－18柱穴一段掘り
25日(月)～27日(水)　T－12・13柱穴掘り、T－31遺構検出
28日(木)　T－31遺検出、文化庁佐久間技官現地視察
29日(金)～30日(土)　T－14・34掘り下げ、遺構検出、一段掘り、写真撮影
7月3日(火)～4日(水)　排水作業、KⅠA上段の田の排土作業
5日(木)　発掘用資材運搬
6日(金)～10日(火)　現場作業中止
11日(水)　発掘用資材運搬
13日(金)　現場作業再開、グランドシートかたずけ、重機にて埋土（表土）除去作業開始
14日(土)　表土はぎ、T－36清掃、写真撮影
15日(日)　表土はぎ、T－16(1)掘り下げ、写真、表土はぎ
19日(木)～22日(日)　表土はぎ、T－16・16(2)・39掘り下げ、T－16断面清掃・写真・実測、重機終了
23日(月)～25日(水)　KⅠ～KⅢ遺構検出、KⅠ土壙写真撮影・実測・掘り上げ、平板実測、KⅢトレンチ設定掘り下げ
26日(木)～28日(土)　KⅢ、KⅥB遺構検出、遺構一段掘り、KⅥ平板実測、近代溝掘り上げ
30日(月)～31日(火)　KⅢ遺構検出、平板実測、一段掘り、土壙掘り下げ、KⅥB遺構検出、一段掘り、西側丘陵上より全景写真撮影
8月1日(水)～4日(土)　KⅠA遺構検出、平板実測、段掘り、KⅢレベリング、KⅥ遺構検出、一段掘り、KⅤ遺構検出、一段掘り、KⅥ検出、平板実測
6日(月)～8日(水)　KⅠA住居址・建物柱穴掘り下げ、KⅥA近代溝掘り上げ、柱穴一段掘り、重機による排土作業
9日(木)～11日(土)　KⅠA建物柱穴掘り下げ、平板実測、レベリング、KⅢ・KⅥA遺構検出一段掘り、KⅢ炉掘り下げ、ⅥA柱穴半掘、平板実測
13日(月)　KⅥ土壙掘り上げ、写真撮影、実測、柱穴半掘
14日(火)　KⅥB平板実測（全体図作成）
16日(木)～18日(土)　KⅠA柱穴掘り下げ、ⅥB建物平板実測、KⅢ建物・全体平板実測
20日(月)　KⅠA住居址平板、掘り下げ、建物平板実測、建物写真撮影、KⅢ炉実測、不明土壙平板実測、KⅥB柱穴掘り下げ
21日(火)　KⅠA住居址掘り下げ、KⅢ、ⅥB建物柱穴住居址掘り下げ、KⅤ遺構検出一段掘り
22日(水)　KⅠA柱穴清掃写真、ⅥA住居址、柱穴、ピット掘り下げ、Ⅴ検出一段掘り
23日(木)　KⅠ清掃写真撮影、平板実測、ⅥA住居址、柱穴掘り、KⅦ北壁清掃
24日(金)　KⅠA建物写真撮影、ⅥA清掃白線引き、ⅥB建物柱穴断面実測、西丘陵上より全景写真撮影、Ⅴ建物柱穴半掘
25日(土)　KⅠ建物平面・断面実測、KⅠ・Ⅲ・Ⅵ建物写真撮影、Ⅴ建物柱穴半掘、窪み掘り下げ
26日(日)　KⅠ建物平面・断面実測、住居址掘り下げ、ⅥA建物平面・断面実測、Ⅶ遺構検出
27日(月)　KⅠ住居址掘り下げ、ⅥB建物断面実測、包含層掘り下げ、Ⅴ建物平面・断面実測、Ⅶ・Ⅷ遺構検出
28日(火)　KⅠA住居址掘り下げ、ⅥB建物平面・断面実測、Ⅴ建物断面実測、Ⅶ遺構検出、柱穴・溝掘り下げ、Ⅷ溝、柱穴掘り上げ平板実測
29日(水)　KⅠA・B住居址掘り下げ、平板実測、ⅥB建物検出掘り下げ、平面・断面実測、Ⅶ建物・溝掘り下げ
30日(木)　KⅠA住居址平板実測、ⅠB住居址掘り下げ、Ⅶ溝掘り上げ、全体平板実測、レベリング
31日(金)　KⅠA住居址掘り下げ、平板実測、Ⅲ・ⅥA・B・Ⅴ・Ⅳ写真撮影
9月1日(土)　KⅠB住居址掘り上げ、写真撮影、平板実測、レベリング
4日(火)　発掘用器材の撤収

第3章　調査の概要

1.　トレンチ調査の概要

発掘調査は圃場整備が計画されている範囲内を中心としてトンンチを設定し、昭和59年5月7日よりトレンチ掘開作業を開始した。トレンチは圃場整備で削平が著しい箇所について密に



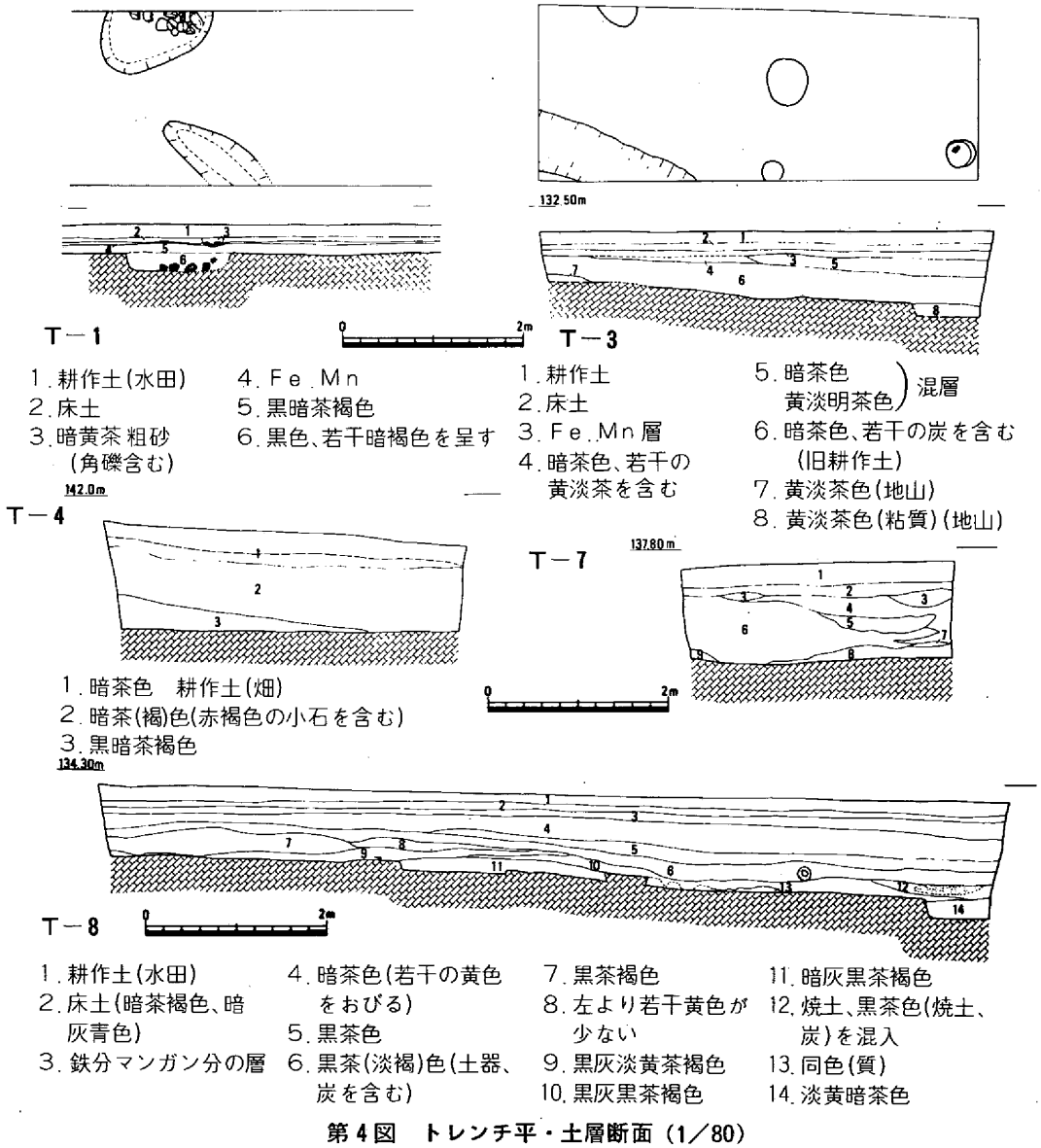
第3図　トレンチ設定図（1／2,000）

設定した。以下順次トレンチの概要を記してみる。

T－1・2は調査範囲の南西部に位置し、現地表面下約20cm～30cmの深さで遺構面に達する。1は中央付近で土壙・溝状遺構。2では無遺構である。T－3は基盤層が南西に傾斜する。遺構は基盤で柱穴・北西部で溝状遺構を検出する。T－4・5・7は急斜面をカットし現水田に整備したもので無遺構、遺物は若干の土師器・瓦片が確認されている。T－6・8は3と同様の傾斜を示す基盤をなし、遺構は柱穴を確認し、遺物は特に8から須恵器・土師器が多量に出土している。T－9・10はT－3の北東の位置で、谷部にあたるものと思われる地区であり、土層堆積では水平堆積が認められるが、最下層は角礫が堆積している。無遺構・若干の土器片を認めたのみである。T－13の北東部で耕土直下で地山に達し、反対側は徐々に下がる。耕作土下において石組みらしい遺構、土壙を検出し、壙内より須恵器・土師器・備前焼の擂鉢片が出土している。T－15、旧地形は南東に傾斜し、トレンチ中央部付近で径約5m、深さは不明、北西部においても同様と思われる遺構を確認した。壙内より須恵器・土師器片を伴っている。T－16・16(1)・16(2)、T－6の北東で、南西に下がって行く、トレンチ北東隅の耕土直下より焼土・炉壁・鉄滓を確認、斜面堆積土中からは多量の鉄滓・炉壁片および土器片も伴い、弥生時代中期のものも含まれている。断面観察によれば、溝状の落ち込みらしきものが認められる。16(2)についても同様のことが言える。16(1)は南に傾斜し、60cm～70cmで地山に達する。堆積土中からは円面硯片が出土している。T－17・18、調査区中央やや北よりに位置し、いずれも耕作土直下で柱穴を検出し、一辺約80cmの方形から径約50cm位までのものである。T－19は16の南で、南西に傾斜する旧地形、地山より柱穴を検出、堆積土内には、土器、鉄滓を含んでいた。T－20～26、いずれも耕作土直下より柱穴（径50cm～80cm位い）多数、21では長方形の土壙を確認する。遺物は須恵器、土師器を伴出している。T－27・28(1)・28(2)、この3箇所は現代（戦後）において整備を行っていることから、遺構は殆んど消滅している状態である。27では溝・土壙状の落ち込み、北東部の埋め土中には瓦片が多量に埋積されていた。28(1)(2)については、耕作土直下の地山面で径20cm前後の柱穴とおぼしきものを確認することができた。出土する遺物は奈良時代の土器を伴出している。T－29では耕作土下において包含層を認め、地山面で柱穴、溝を確認、遺物は須恵器・土師器が出土している。瓦片も含まれている。南西側の水田は、瓦粘土採掘のため遺構は消滅している。T－30、耕作土直下で地山面に達し、無遺構。T－31・34は、18と同様の遺構が確認された。旧地形は南西に徐々に下がっている。T－32・33、32は谷部にあたる位置で、造成土内に遺物は含まれているが遺構は存在していない。33も前者と同様である。T－35(1)・(2)、双方とも耕作土直下で地山面に達し、無遺構。T－36・37は旧地形が南東に傾斜していおり、地山面において柱穴を確認することができ、埋積土中から土器片・鉄滓が少量出土している。T－38、急斜面に盛土造成であり、無遺物・無遺構、T－

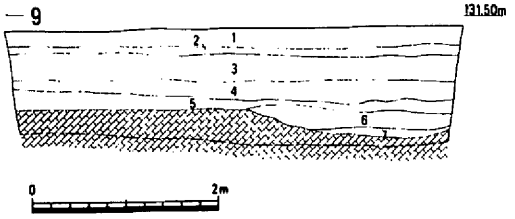
39、旧地形は南西に傾斜をしている。地山面において柱穴を検出した。柱穴は10層下より掘り込まれている。埋積土層はほぼ水平に堆積している。遺物は埋土中より若干の土器片も認められた。T－40、旧地形はほぼ水平に近い。これは後世の削平によるものである。若干の柱穴らしい遺構を認めることができた。

以上が圃場整備地内における各トレンチの概要である。この調査結果から、南西方向に伸びる舌状の丘陵とさらにその丘陵を挟んで谷の存在することが明らかになった。また、遺構の規模ならびに密度に関すれば、トレンチ調査の結果から推測して、大規模な建物等が考えられる地域である（昭和47年・48年の縦貫道の調査からも考えられる）。



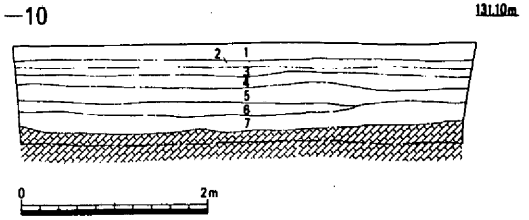
第4図　トレンチ平・土層断面（1／80）

T－9



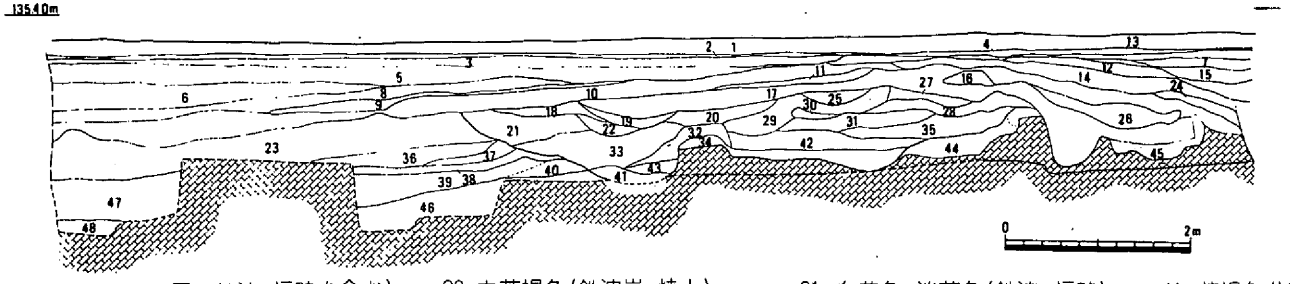
1. 耕作土
2. 床土
3. 黒茶色(Fe、Mn含質)
4. 暗茶色
5. 黒茶色
6. 黒茶色(Fe、Mn含)砂礫層
7. 暗茶色(砂質土)

T－10



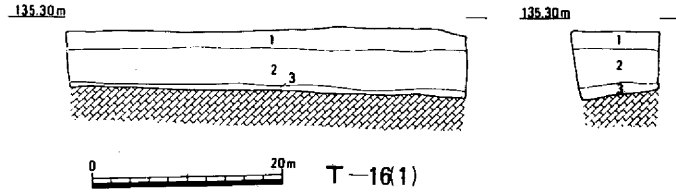
1. 耕作土
2. 床土、黄淡褐色、暗灰色
3. Fe、Mn層
4. 淡黄茶色(礫を含む)
5. 淡黄茶色
6. 暗茶色
7. 黒茶色

T－16



1. 耕作土
2. 床土
3. 黒炭褐色(Fe、Mn層)
4. 暗茶褐色
5. (淡)茶淡褐色
6. 暗淡色
7. 暗茶色
8. 暗茶色赤褐色焼土を若干含む
9. 暗茶色赤褐色焼土を含むわずかに鉄滓を含む
10. 暗茶褐色(炭、焼土若干の鉄滓、炉壁を含む)
11. 赤褐色(焼土、炭)
12. 黒茶色(若干の焼土、炭)
13. 黒茶色(若干の焼土)
14. 黒茶色、黒灰色、暗黄白色、焼土、鉄滓
15. 黒茶色(焼土、炉壁少量)
16. 暗茶色、暗黄白色(粘)
17. 暗黒茶色(焼土、若干の炭含む)
18. 暗茶色(焼土若干の炭を含む)
19. 茶褐色(炉壁片を含む)
20. 赤茶褐色(鉄滓炭、焼土)
21.
22. 茶褐色(焼土)
23. 暗茶色(鉄滓、炉壁等を含む)
24. 茶褐色(焼土、炉壁少量)
25. 黒茶色(炉壁片)
26. 黒茶色、白黄色(粘)(焼土、鉄滓少量、炭少量)
27. 茶淡褐色(若干の炭、白黄色粘土を含む)
28. 淡茶色、白黄色粘土(若干の炭)
29. 暗茶褐色(鉄滓、炉壁)
30. 黒茶褐色(鉄滓、炉壁)
31. 白黄色、淡茶色(鉄滓、炉壁)
32. 暗茶色(焼土、炭を含む)
33. 暗茶色(焼土、鉄滓、炉壁片)
34. 暗茶色(若干の焼土、炭を含む)
35. 暗茶淡白黄色(炭まじり)
36. 鉄滓の炉壁の層
37. 暗茶褐色(焼土、炭、若干の鉄滓を含む)
38. 茶褐色(若干焼土、炭を含む)、白黄色粘土
39. 黒灰色粘度質(若干炭含む〃)
40.
41. 茶褐色黄茶褐色(炭、焼土含む)
42. 淡茶色(若干の焼土鉄滓)
43. 淡茶色(炭を若干含む)含む)
44. 白淡黄茶色
45. 茶褐色、淡黄白色(鉄滓……少量)
46. 黄白色粘土
47. 黄褐色黄淡褐色(炭、焼土を含む)
48. 暗青灰色(砂礫)

第5図　トレンチ土層断面(1／80)

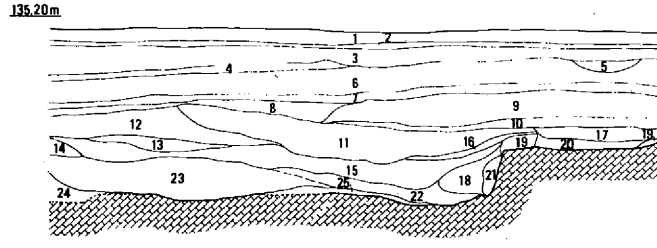


T－16(1)

T－16(1)

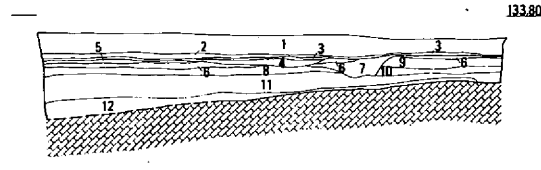
1. 暗黄灰色土
2. 灰黒褐土、地山黄色土斑
3. 灰黄橙色粘土色

1. 暗黄灰色土
2. 灰黒褐土、地山黄色土斑
3. 灰黄橙色土



T－16(2)

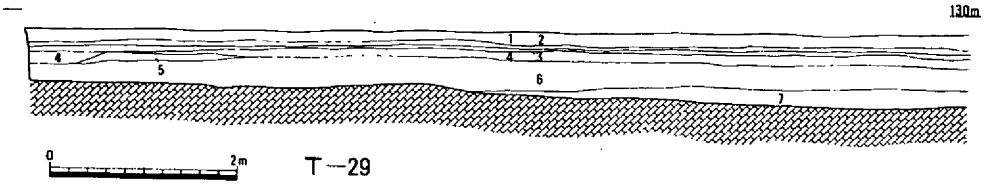
1. 耕作土
2. 床土
3. 暗茶褐色(わずかに焼土粒、炭を含む)
4. 暗灰茶色(旧畑の耕作土)
5. 暗茶色(炭含む)
6.
7. 黒灰茶色(ごく少量の鉄滓焼土を含む)
8. 黒暗茶色(少量の炭、焼土を含む)
9. 暗茶褐色(焼土、炭、小粒の鉄滓を含む)
10. 黒灰茶色(炭を含む)
11. 暗茶褐色(炭、焼土、鉄滓、炉壁を含む)
12. 黒茶褐色(炭、鉄滓を含む)
14.
15. 黒暗褐色(わずかの鉄滓と若干の炭を含む)
16. 黒灰色(少量の淡黄色粘土のブロック、鉄滓、焼土を含む)
17. 暗赤褐色(焼土、炭を含む)
18. 淡黄色、黒灰色の混層(若干炭を含む)
19. 白淡黄色粘土
20. 暗茶色(炭、焼土、黄白色粘土ブロックを含む)
21. 白淡黄色粘土(黒灰色土を若干含む)
22. 黒灰色(若干の淡黄色(粘)とと少量の鉄滓を含む)
23. 黒灰色、淡黄色(粘) の互層
24. 黄色、白黄色粘土
25. 黄色、白黄色粘土



T－19

1. 耕作土
2. 暗青灰色、暗黄茶褐色
3. 床土
4. 暗黄茶色
5. 暗茶黄色
6. Fe、Mn層
7. 暗茶褐色
8. 暗茶色、黄褐色
9. 暗茶色
10. 8. と同じ
11. 暗(黒)茶褐色
12. 暗茶色

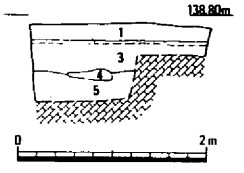
第6図　トレンチ土層断面（1／80）



T—29

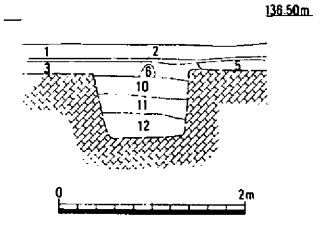
1. 耕作土
2. 床土(暗黄茶褐色)
3. Fe、Mn層(黒茶褐色)
4. 茶褐色
5. 茶淡褐色
6. 暗茶色
7. 黒褐色

T—32



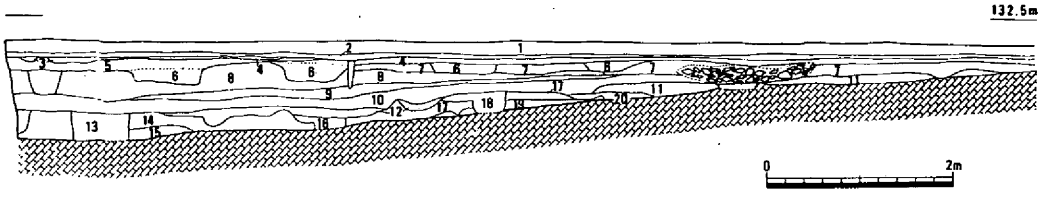
1. 耕作土
2. 床土(黄淡褐色)
3. 黒茶褐色(地山の小石を含む)
4. 茶淡褐色(粘質)
5. 暗茶褐色

T—33



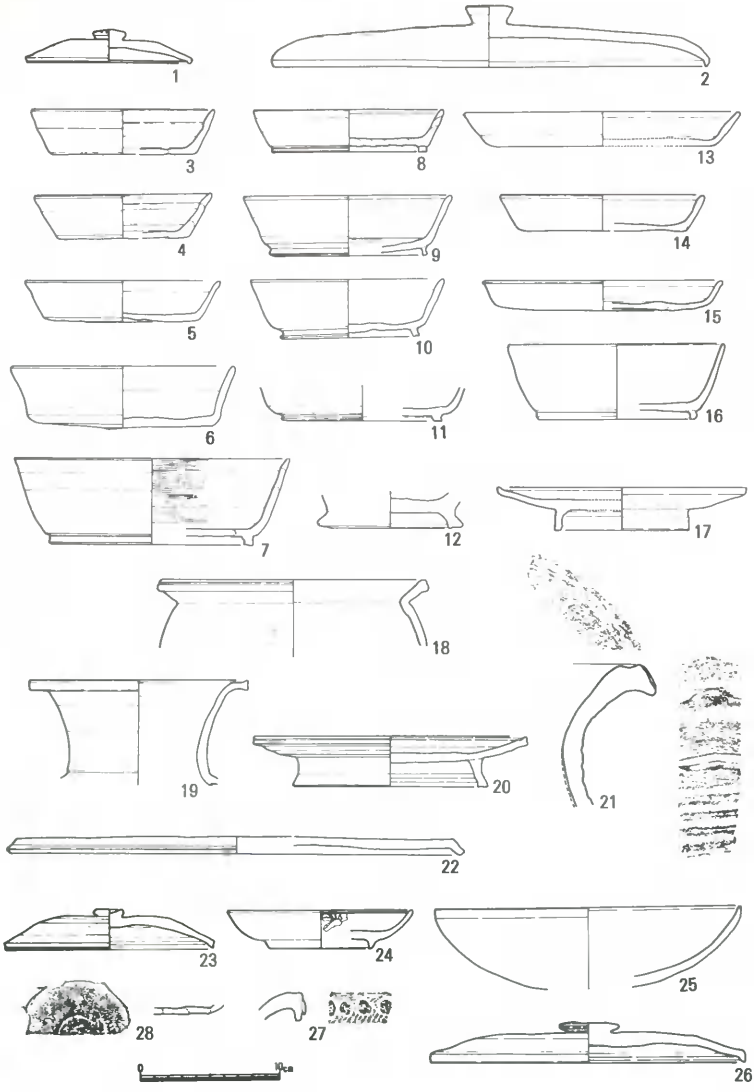
1. 耕作土
2. 床土(淡黄茶褐色)
3. 暗黒茶色(Fe、Mnを含む)
5. 黒色、茶淡黄色
6. 淡黒(暗)茶色
10. 茶淡褐色
11. 黒色(若干の暗茶色を含む)
12. 暗茶色(粘質)

T—39

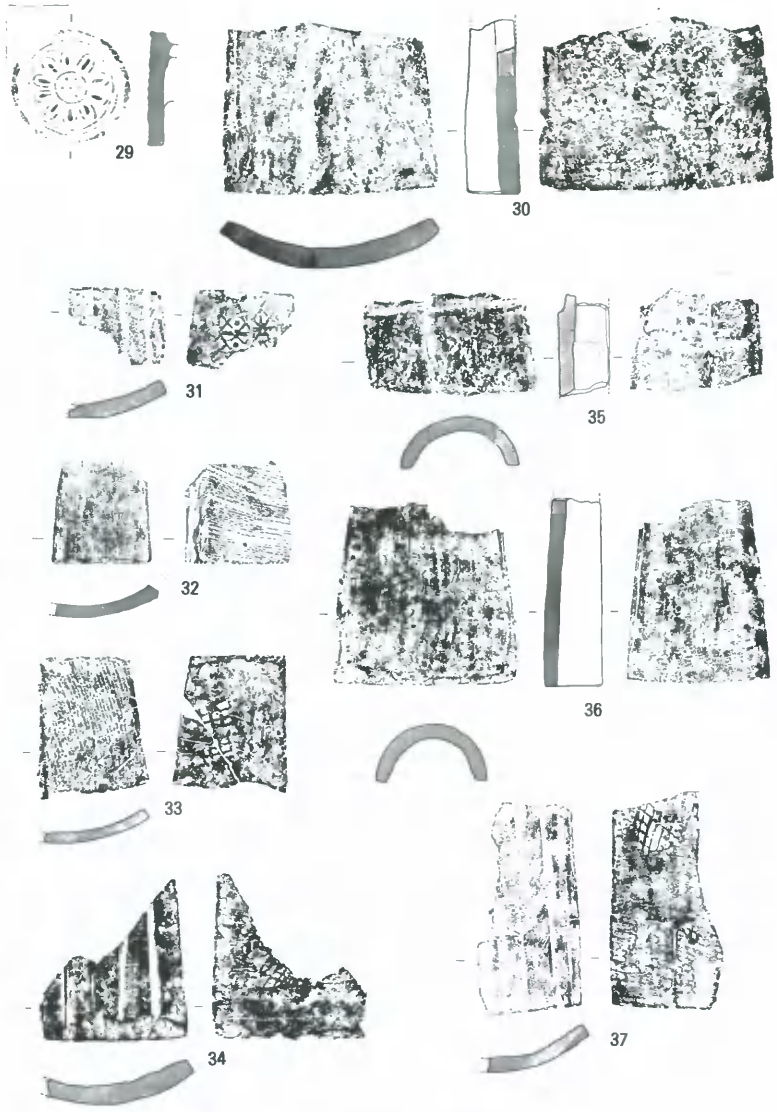


1. 耕作土
2. 床土
3. 黄淡褐色、黒灰茶色
4. Fe、Mn層
5. 黒灰茶色
6. 黒茶褐色、暗灰色
7. 黒茶色、淡黄茶色
8. 茶色(若干黄味をおびている)
9. 暗茶色(若干の焼土、炭を含む)
10. 黒茶色(炭、少量の焼土を含む)
11. 暗黄色、暗茶色
12. 暗茶色(暗黄色土を少量含む)
13. 黒茶色(柱穴)
14. 暗茶色、暗黄色互層
15. 暗茶褐色
16. 暗茶色(粘)(わずかに炭、暗黄色〈粘〉を含む)
17. 暗黄淡茶色
18. 暗茶褐色
19. 黄淡茶色
20. 淡黄茶色

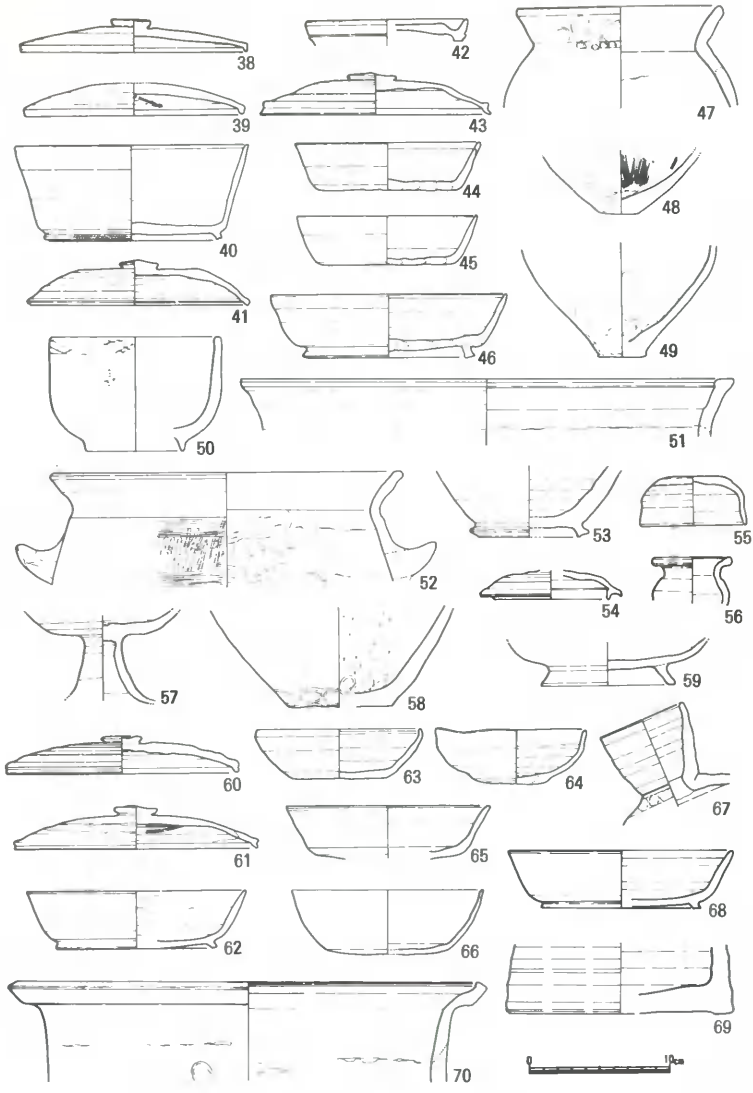
第7図　トレンチ土層断面（1／80）



第８図　トレンチ出土遺物



第９図　トレンチ出土遺物(1／8)



第10図　トレンチ・包含層出土遺物

2. ＫＩ区竪穴式住居

竪穴式住居第１群（第13図、図版４）

直径約６～８ｍ前後の竪穴式住居壁溝が５棟分検出された。いずれも地山面を掘りこまれた孤を描き、柱穴群も多数検出された。いずれも、奈良時代以来、かなりの掘削を受けているが柱穴の残存は良好である。柱穴間をつなぐ床面上の細溝も数条検出されている。出土遺物から、弥生時代中期の円形を呈する竪穴式住居址群と推定される。

竪穴式住居第２群（第14図、図版５）

建物－３の南で検出された住居群で、約４棟分の竪穴式住居の壁溝が検出されている。北側の壁溝は西端で曲折するが、直角ではなく、住居外周溝の可能性がある。南側の周溝の一部には、住居中央に向かう溝が掘りこまれる。円形あるいは隅丸方形の平面形を描く竪穴式住居群である。

竪穴式住居第３群（第15図、図版６）

奈良時代に比定される溝－１に切られて数棟分の竪穴式住居の壁溝が集中する。もっとも外側（北側）の壁溝はやや隅丸方形を呈するが、他は円形を描く壁溝と推定される。また、溝－２の西側にも浅い、竪穴式住居状の掘方が検出されているが、一辺約４ｍの比較的小形の竪穴式住居の可能性がある。出土遺物から弥生時代中期に比定される住居址群である。

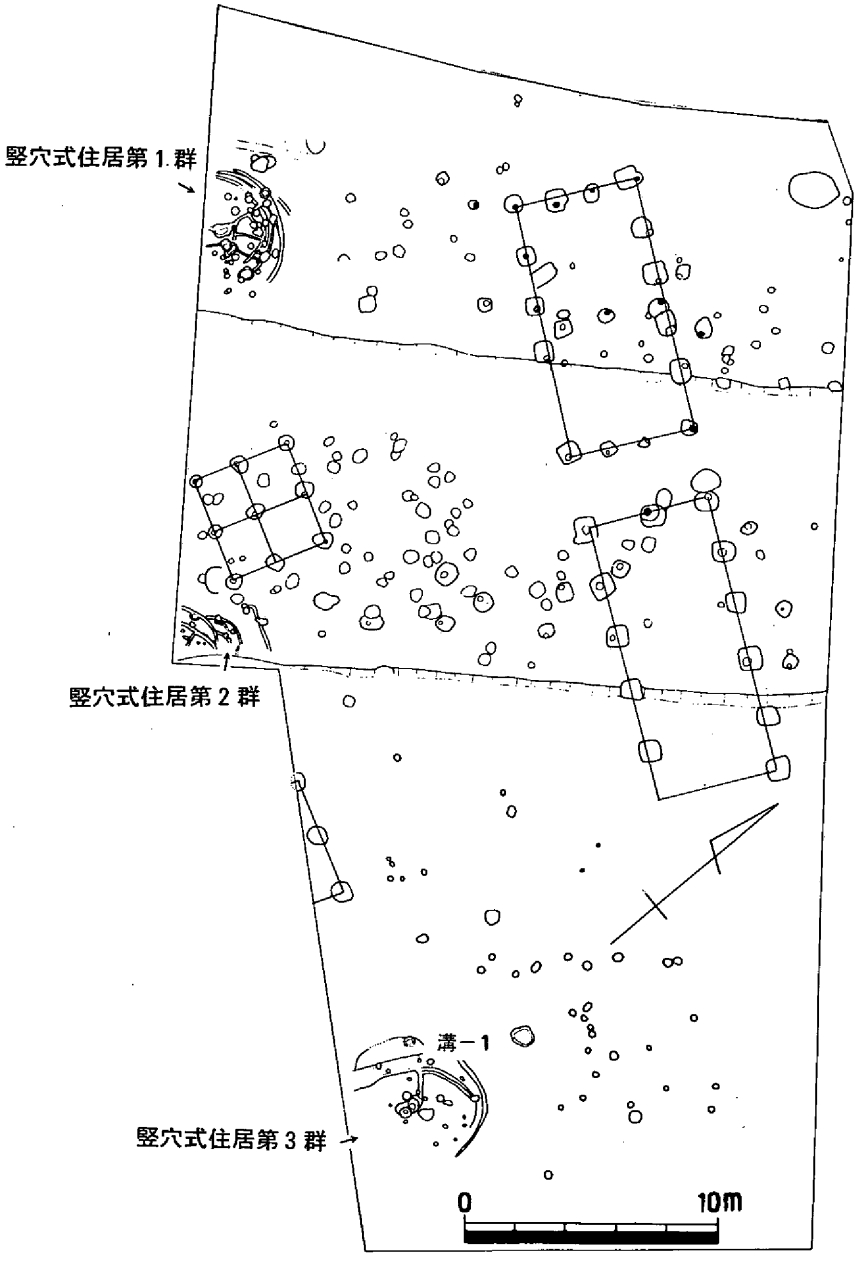
溝－１（第12図、図版８－１）

検出全長約５ｍ、巾90～120cm、深さ12～25cmを測る溝で、やや東振する南北方向を示す。断面形は逆台形を呈し、炭・須恵器・土師器片を含む灰褐色土が埋積するが、最下層には灰黄色土が全体に埋積している。時期的には、その方向が建物－３の柱方向に近く、建物群等を平面的に区画する溝と考えられるが、建物－２まで達しておらず、旧地形はかなり傾斜していた可能性がある。時期的には、奈良時代に限定されよう。

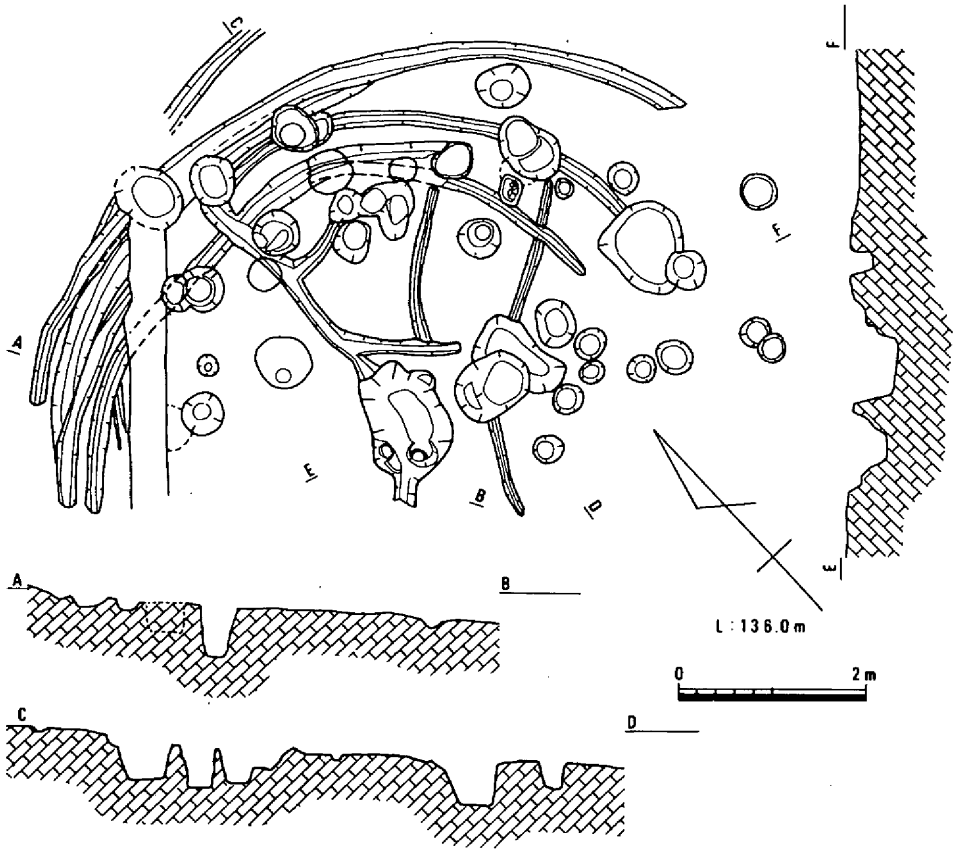
溝－２（第23図、図版13－２）

建物－13の北西方約20ｍのやや高位を示す地点で検出された。やや東振する東西方向を示す溝である。図に示すように、断面形は浅く、凸レンズ形を呈する。検出全長約3.5ｍ、巾約115cm、深さ約15cmを測り埋積土は炭・焼土を含む暗灰褐色土である。出土遺物には、瓦片や須恵器、土師器片が多くみられ、奈良時代に比定される。性格は溝－１と同様、平面的に企画された溝である可能性が強い。なお、南に接して２間分の柱穴が３本、東西方向に並んで検出されたが、ほぼ７尺を測る柱間心々距離から、小規模な掘立柱建物か柵列の可能性が強い。

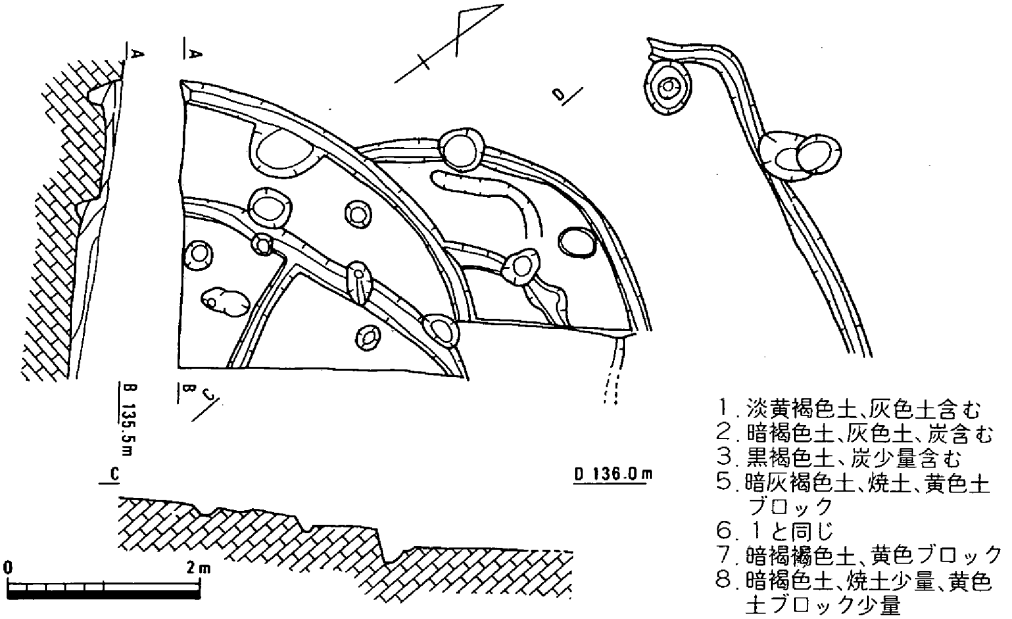
第11図　遺構全体図(1／500)



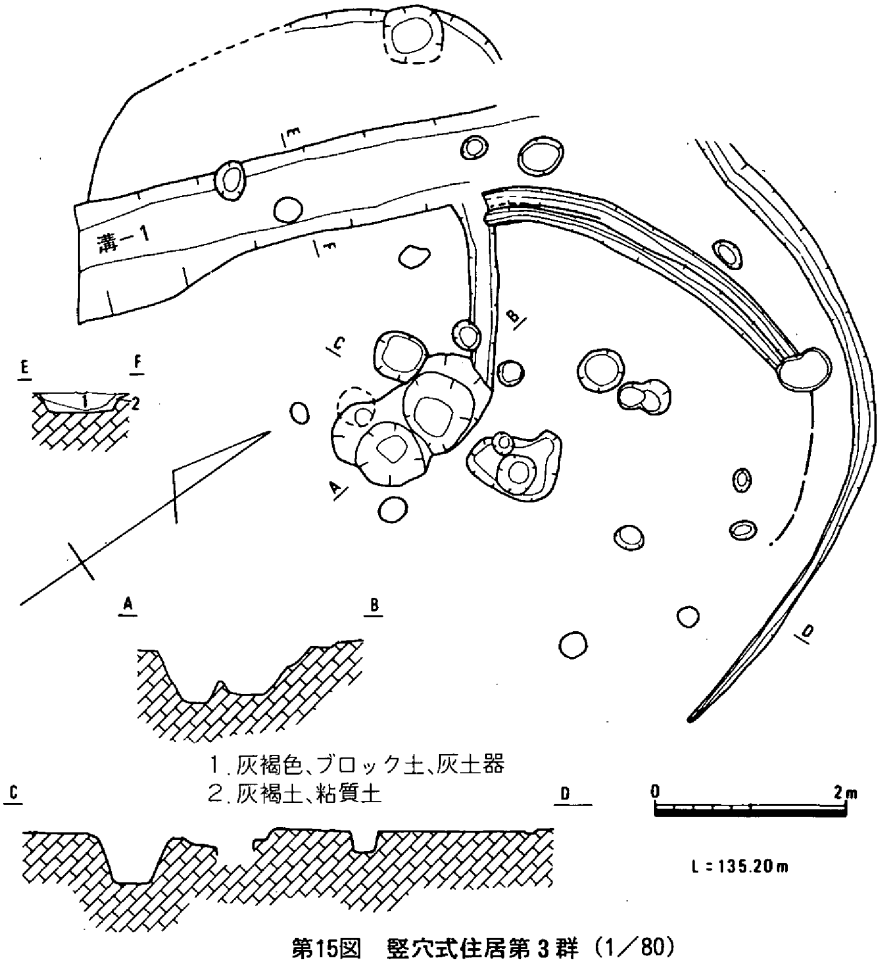
第12図　KⅠA•B区遺構全体図（1／300）



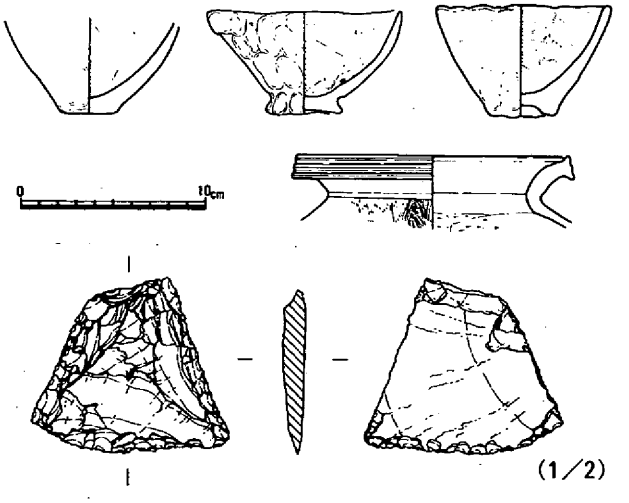
第13図　竪穴式住居第１群（1／80）



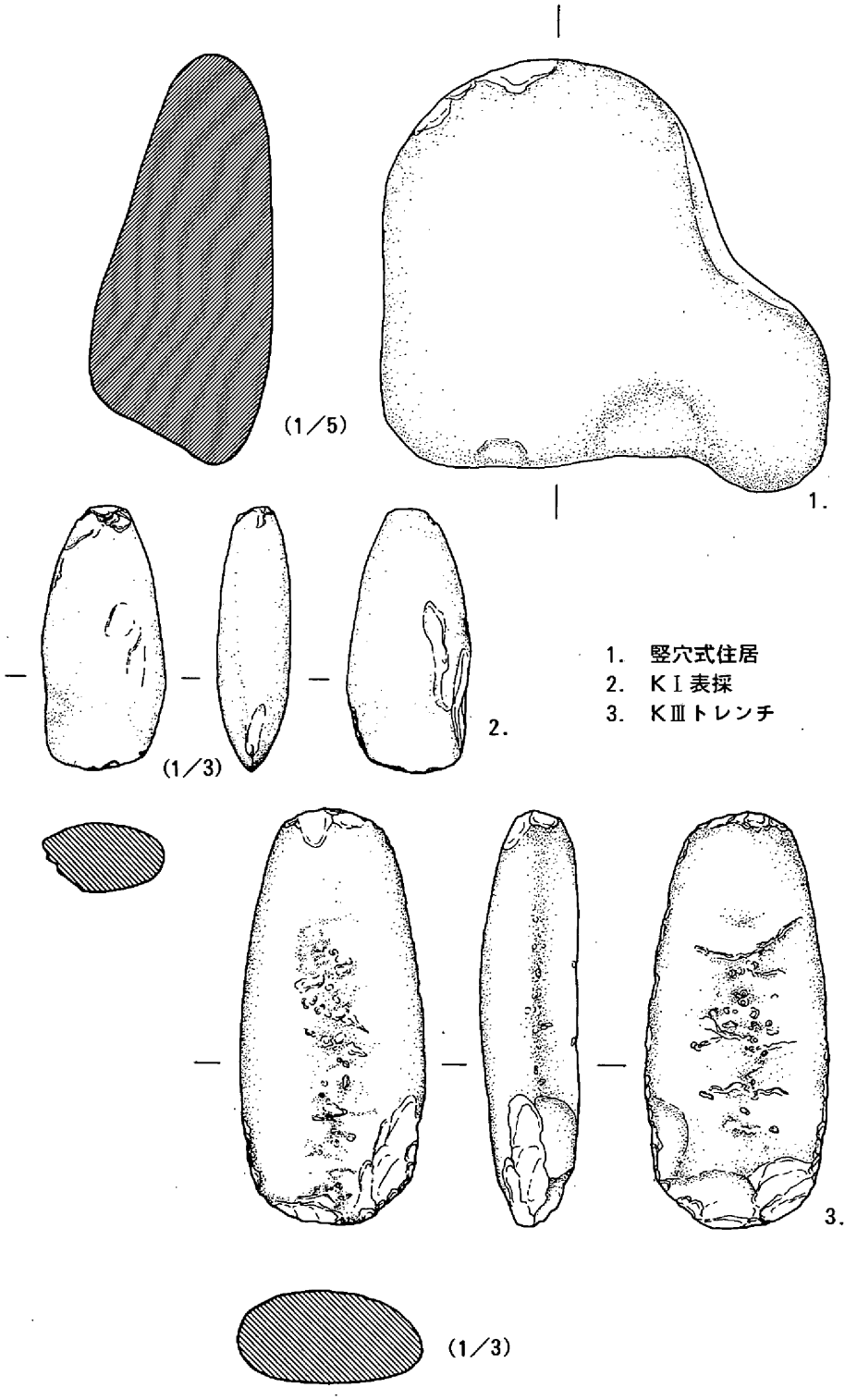
第14図　竪穴式住居第２群（1／80）



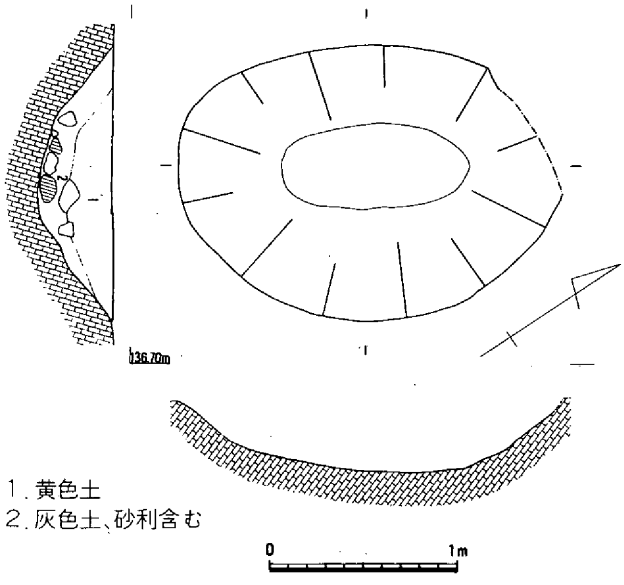
第15図　竪穴式住居第３群（1／80）



第16図　竪穴式住居出土遺物



第17図　竪穴式住居・etc出土遺物



第18図　KI$_A$ 土壙－1（1／40）

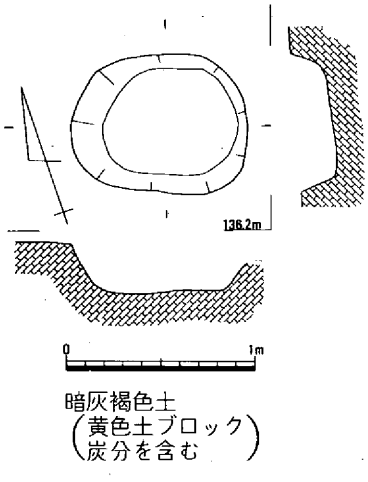
3. 土　壙

土壙－1（第17図、図版7－1）

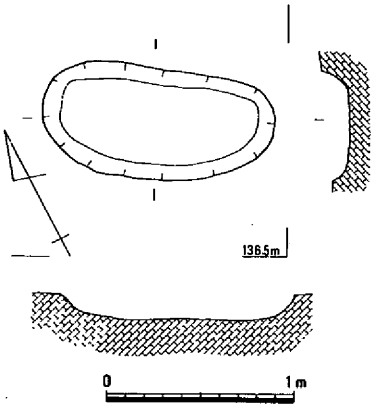
長径約200cm、短径約145cm、深さ40cmを測る長円形を呈す土壙である。明黄色を呈する地山の土が埋積しており、下層には多数の小児頭大の角礫と破礫を含む灰色粘質土がみられる。最下層からは平瓦の破片が出土しており、時期的には奈良時代に比定されるが、性格・用途は不明である。

土壙－2（第18図、図版7－2）

長径約120cm、短径約60cm、深さ約13cmを測るややいびつな長円形を示す土壙で、黄色土ブロック・木炭片を含む暗灰褐色土が埋積する。土壙－4を切って存在するが弥生時代に比定されよう。性格は不明であるが、土壙の形状や埋積土から墓の可能性はないと考えられる。



第19図　KI$_A$土壙－2（1／40）



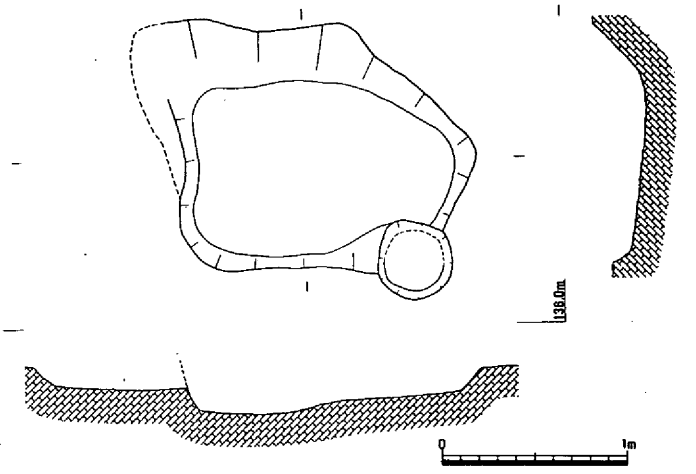
第20図　KIA土壙－3（1／40）

土壙－3（第19図）

建物－3の南に接して存在する、長径約90cm、短径約75cm、深さ約20数cmを測る不整円形を呈する土壙である。柱痕跡は観察されず、奈良時代の柱穴とは考えられない。埋積土は灰褐色を呈する粘質土で、弥生時代の土壙と考えられる。

土壙－4（第20図）

奈良時代の柱穴及び、土壙－2に切られる不整形土壙で、長径約170cm、短径約125cm、深さ15～25cmを測る。埋積土は、炭細片を含む淡赤褐色土で、奈良時代の建物群の柱穴埋積土とは全く異なる。時期は弥生時代中期に比定される。

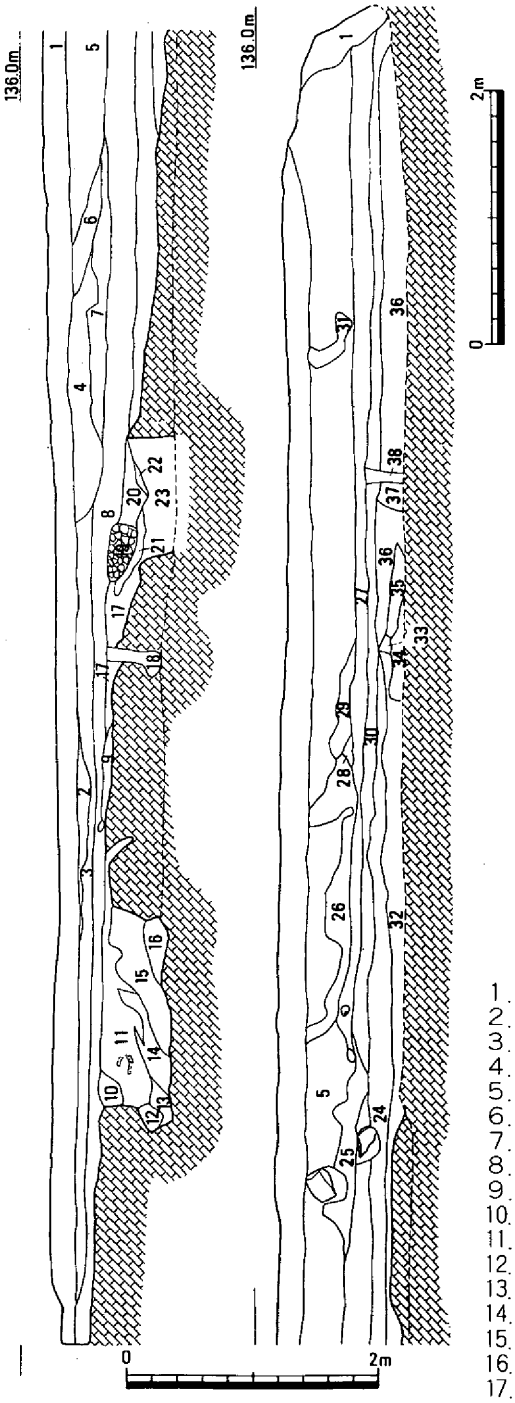


第21図　KIA土壙－4（1／40）

4. KⅡ区

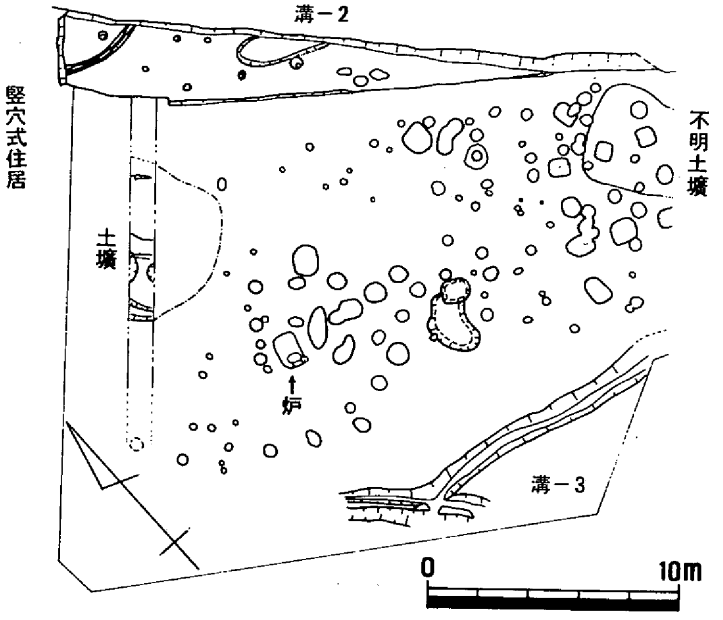
この調査区は北西端に位置し、農道建設予定地となっているところである。旧地形は北西から南東に向けて傾斜し、遺構は地山面において検出される。この地点は工事による削平が遺構面まで達しないため、土層の断面観察調査のみで終了した。

基本的な層序は表土層、造成土層、包含層の3層に区分され、包含層内からは須恵器、鉄滓が出土している。断面で検出された遺構は土壙、柱穴である。土壙は幅約160㎝、深さ約55㎝を測り、袋状を呈していた。遺物は奈良時代の須恵器、土師器、鉄滓、炉壁片が一括出土している。このことから、この地区周辺で出土する多量の鉄滓、炉壁片は鍛冶炉が存在していたことを想定させるとともに、奈良時代前期には鉄生産の操業をしていたことを示す調査区であるといえよう。



第22図　KⅡ　北壁土層断面（1／60）

1. 耕作土
2. 黄褐色土
3. 茶褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 暗赤褐色土
6. 暗褐色土
7. 茶褐色土
8. 暗茶褐色土
9. 黄茶色土
10. 暗灰色
11. 黒褐色
12. 暗灰色粘質土
13. 暗黄灰色土
14. 暗灰色(黄色ブロックあり)
15. 赤褐色(地山の混入)
16. 黒色粘質ブロック
17. 黄褐色土
18. 暗褐色粘質土
19. 暗渠
20. 暗褐色
21. 暗褐色粘質土
22. 黄色粘質土
23. 暗褐色(砂まじり)
24. 暗黄褐色土
25. 茶褐色土
26. 暗黄茶褐色土
27. 暗褐色土(炭あり)
28. 茶褐色土
29. 黄茶褐色土
30. 暗褐色土
31. 灰色粘質ブロック土
32. 茶褐色土
33. 黒色土
34. 黒褐色土
35. 茶褐色粘質土
36. 黒褐色土(包含層、土器、鉄滓含む)
37. 暗褐色粘質土
38. 暗灰色土(抗跡)



第23図　KⅢ区遺構全体図（1／300）

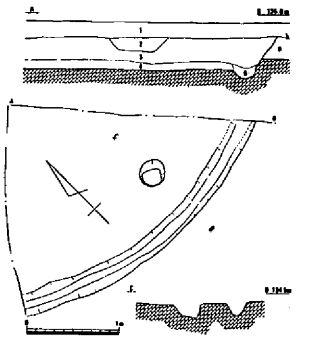
5.　KⅢ区（第23図）

調査範囲内の旧地形は、南西に傾斜を示し、面積は約460㎡である。この範囲内には竪穴式住居・炉・建物（KⅣBにまたがるもの）・溝・土壙・不明土壙・柱穴群等が検出されている。この地区は畑地から水田に改善される際、かなりの削平を受けているため、遺物の存在も現状のようになったものと思われる。

竪穴式住居（第24図、図版13－1）

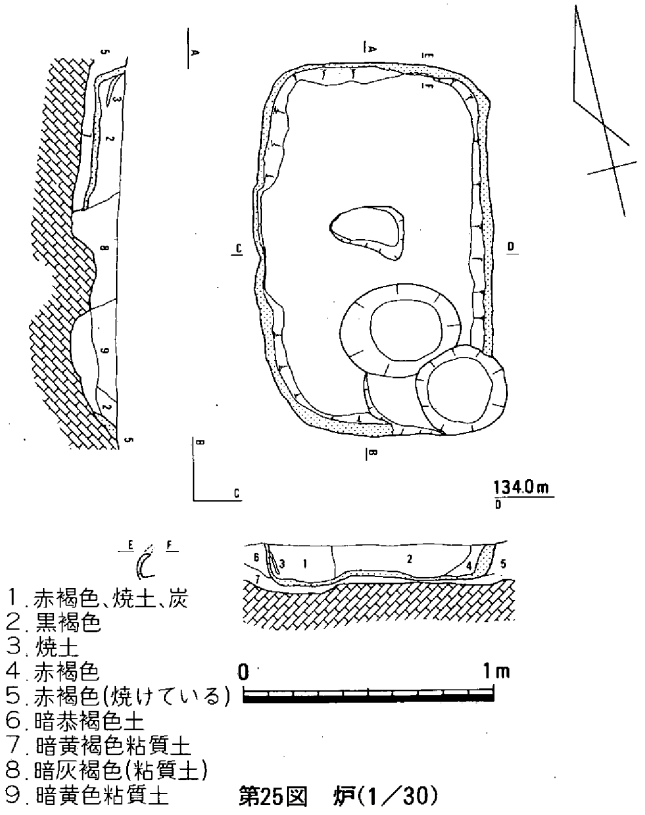
KⅡ～KⅢの境界部分において検出された壁体溝幅20cm～23cmの円形とおぼしき竪穴式住居である。Ⅲ地区において確認され、深さは32cm前後で、Ⅱ地区は盛土地域となり遺構に関係しない（整備が）ため調査は上部でとめている。

出土遺物（破片ばかり）からみて弥生時代中期の様相を呈する住居である。



1.
2. 黒灰色砂含土
3. 小砂含む暗褐灰土層(包含層)
4. 淡灰褐土を主体とする粘床面
5. 黒褐色土(黒っぽくブロック含む)
6. 黄橙色土(地山の上にのみ旧表土的土層)

第24図　竪穴式住居(1／80)



第25図　炉(1／30)

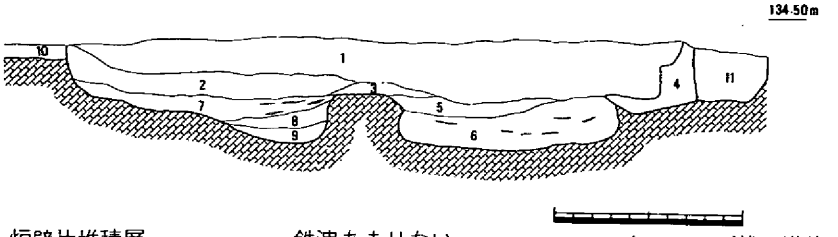
炉　(第25図、図版14)

この遺構はKⅢ区のほぼ中央部付近で検出されたものである。遺構は新しい時期の柱穴で一部切られてはいるが、平面プランは長方形を呈し、規模は長径147cm×短径95cm×深さ14cmを測る。周囲には赤褐色を呈する幅3～5cm厚の焼土帯がみられた。この赤く焼けた部分は強火を受けていたためか、壁面周囲、床面ともまんべんなく堅く焼けていた。削平を受けているため、遺構の上部構造は不明であるが、北側部分の炉壁は「く」の字状に内傾していたことからみて、この炉壁はゆるやかなカーブをもって全体が内傾していたものと推察される。床面は中央部がやや突起しているが、全体的に平担ということができる。

炉内部は炭、焼土で埋まっており、出土遺物は無い。

本遺構は炉として使用されたものではあるが、どのような性格の炉であるかはなお検討を要する遺構である。あえて推察するならば、この炉の約5m程北に多量の鉄滓、炉壁片等を出土した土壙が2個検出されていることや炉壁が非常に堅く焼けている点などからみて鍛冶炉の可能性をもつ遺構ということができよう。

出土遺物が無いため使用時期は不明であるが、奈良～平安時代に使用されたものと推察される。



1. 鉄滓、炉壁片堆積層
2. 暗茶褐色層(炭、焼土多い)
黄色地山土あり
鉄滓少ない
3. 黒褐色(炭、焼土、地山土含む)
4. 暗褐色粘質土(炭、焼土含む)
鉄滓あまりない
5. 黒褐色(炭が多い)
6. 暗黄褐色土(黄色地山土の混入あり)炭のレンズ状堆積あり、灰含む、鉄滓あまりない
7. 黒褐色(焼土、炭あり)(地山土がレンズ状に堆積している)
8. 黒褐色(炭が多い)
9. 茶褐色粘質土
10. 暗黄褐色土
11. 黄褐色土

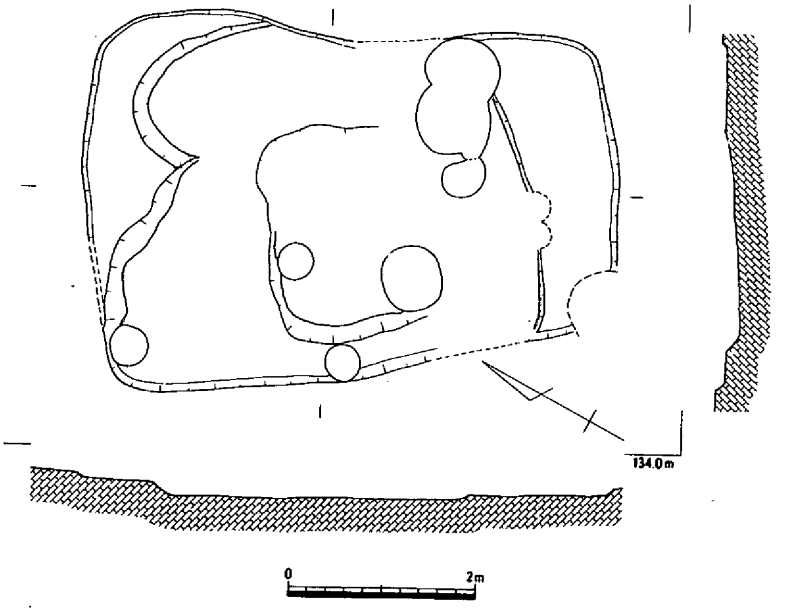
第26図　土壙　土層断面図(1／80)

土壙（第26図、図版15）

KⅢ北西隅に位置し、径約660cm、最深部で120cmを測るものである。遺構はトレンチによる掘り下げにとどめたため、全容は不明、しかし下部で2つの円形土壙を検出、一方の底部には柱穴らしきピットを確認。埋積土中には多量の鉄滓・炉壁が混入、土器・数片の板材も含まれていた。性格・規模は不明、前記の遺物は遺構放棄後投入されたものであろう。時期不明。

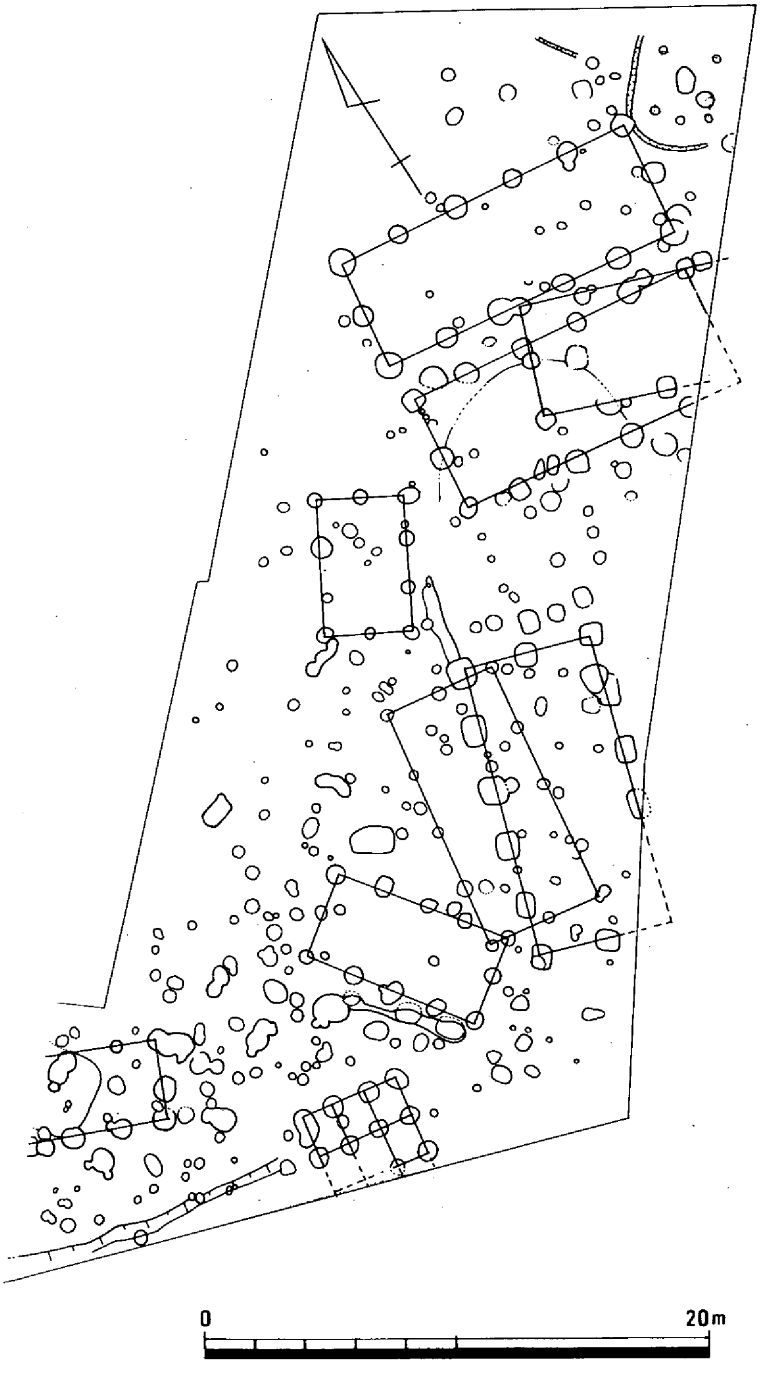
不明土壙（第27図、図版16）

KⅢ・KⅣにまたがって検出された570cm×364cmの北が若干広まった歪な隅丸を呈する長方形の平面形態を示すものである。検出時点では方形の竪穴式住居の形態であった。この遺構を掘り下げて行くに従って、床面とおぼしき面が歪な面を呈し、柱穴らしきものは認められず、底面は段状をなし、若干南が低くなって基盤層となる。掘り上げ後の平面形は不整形の掘り方を呈し、住居址とは考えがたい遺構である。時期は古墳時代と思われる。

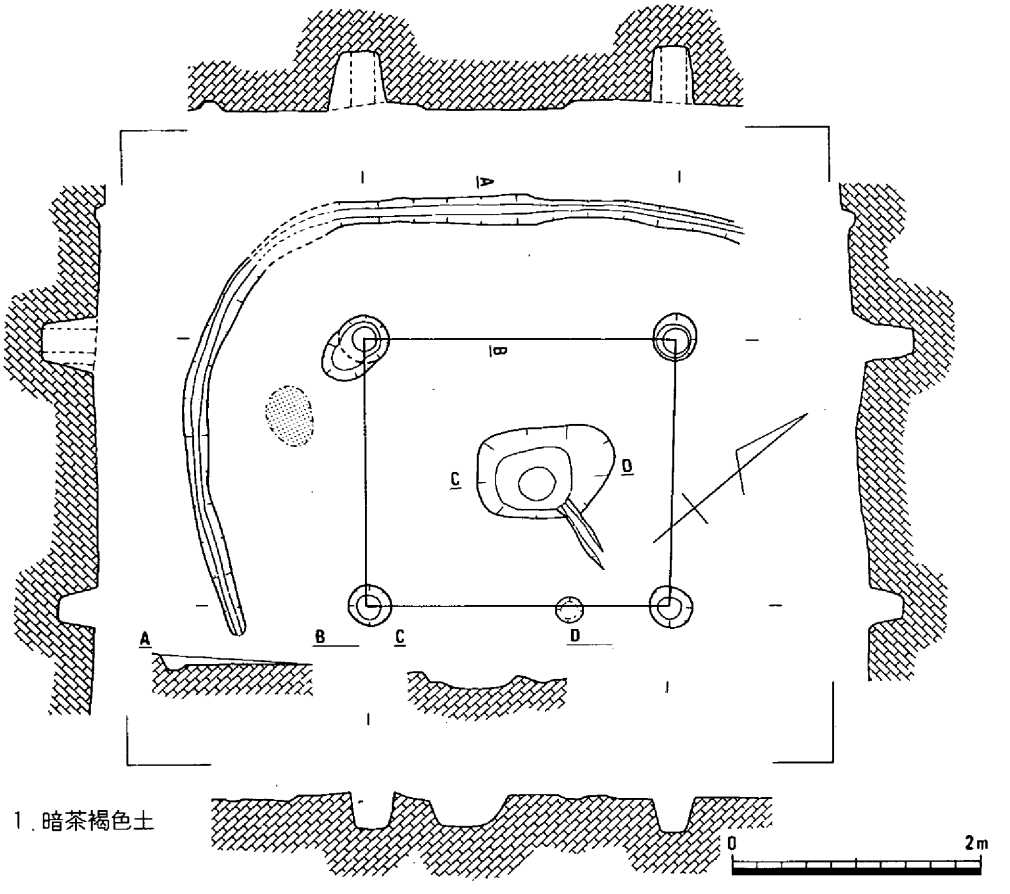


第27図　不明土壙（1／80）

6. KⅣ区



第28図　KⅣA・B区遺構全体図(1／300)



第29図　KⅣA 竪穴式住居（1／60）

(1)　**竪穴式住居**（第29図、図版17－1）

KⅣA 調査区の北東隅に位置する竪穴式住居で、その平面形態は不整形である、隅丸方形が基本形と思われるが約1／2の壁帯溝が存在するのみであるが基本通りの平面形態をとっているものと思われる。柱穴は4本あり、西隅の柱穴のみ重複している。このことから、この住居址は建て替えを行っている。

柱穴の東西間隔は、南・北両列とも215cmを測る。南北の間隔は、東側で240cm、西側で250cmを測る。住居址のほぼ中央とおぼしき位置に、不整長方形（110cm×70cm）、深さ15cmを測る中央穴がある。さらに、この中央穴北東部から溝が付属している。住居址は南東に傾斜する面に位置しているため、残存する溝は60cmで、北東部柱穴に連なる可能性もある。また、この中央穴の南西で壁体溝から45cm内側の位置に50cm×35cmの楕円形の焼土部分を認めることができた。

この住居址の立地は本来斜面であったのと、後世の削平を受けて現存の状態で存在する。

遺物は土器片が少量出土しているのみである。時期は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期と思われる。

⑵　**竪穴式住居**（第30図、図版17－１）

本住居址はKⅣA の南部分において検出した。平面形態は楕円形を呈し、推定で7.5ｍ×９ｍの規模と思われる。柱穴は床面上に多数検出したが、そのうち住居址に伴うものは半数以下であり、この竪穴式住居の壁体溝は同一の溝を用いて建て替えを行っていることが明らかである。住居址に伴う遺構は、中央ピット、柱穴は６本あるいは８本と思われる。

中央ピット（１）に伴う柱穴は１～６の６本、さらに同一ピットを中心にした柱穴が１・７～13の８本の２軒と、中央ピット（２）に伴う柱穴があるものと思われるが、この柱穴は不確定である。６本柱の柱穴柱間は１～２で350㎝、２～３は330㎝、３～４は330㎝、４～５は295㎝、５～６は315㎝、６～７は335㎝で、柱穴の深さは最も浅いもので17㎝、最も深いもので44㎝を測り得た。

次いで８本柱の柱穴柱間は１～７で230㎝、７～８は220㎝、８～９は170㎝、９～10は235㎝、10～11は235㎝、11～12は290㎝、12～13は225㎝、13～１で255㎝を測り得た。

以上の柱穴に伴うと思われる中央ピット（１）の規模は長辺85㎝、短辺42㎝、最も深い部分で23㎝という数値を測り得た。

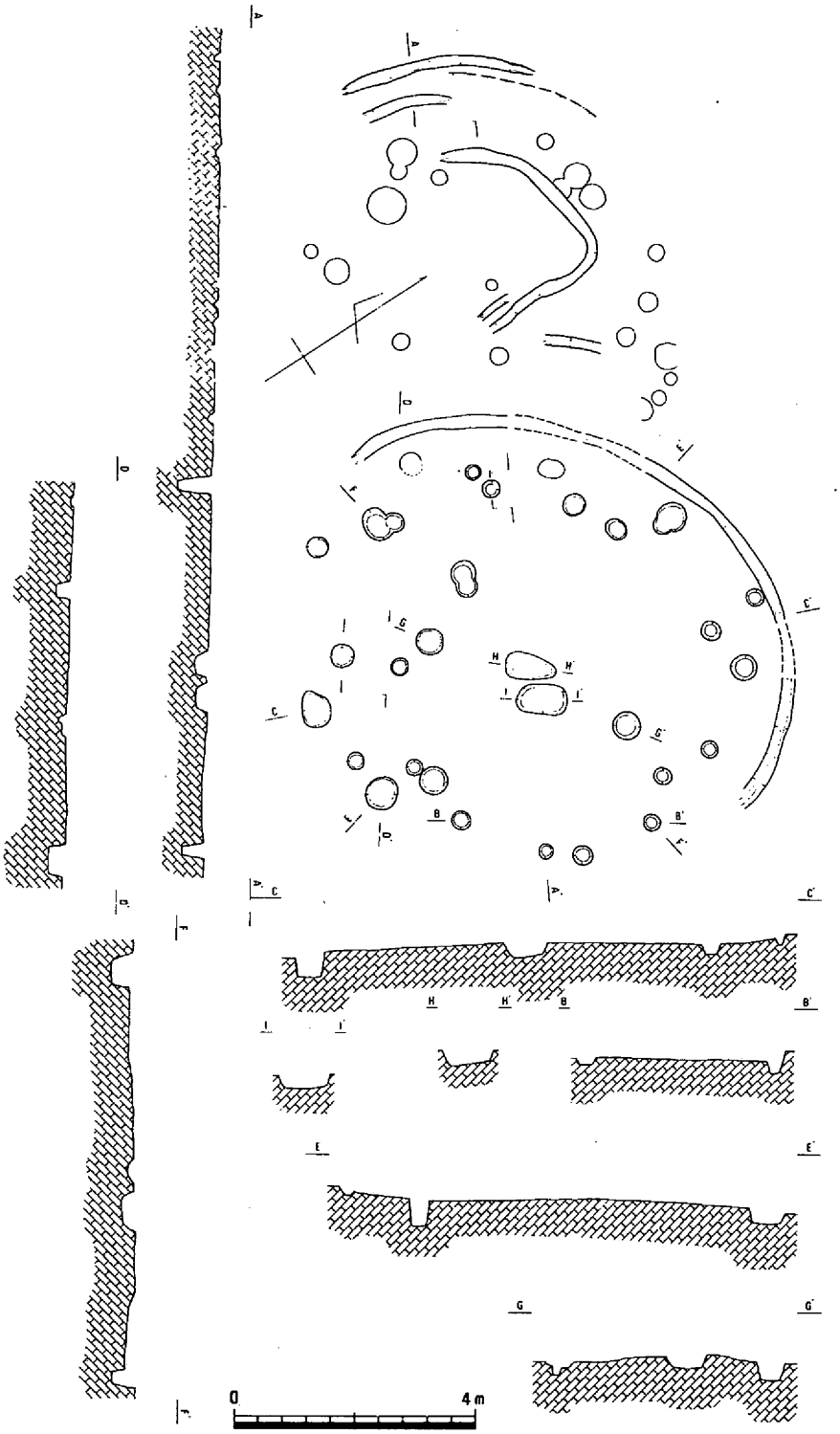
さらに壁体溝についてみれば、溝の幅は17㎝～25㎝を測り、約１／２が現存する。中央ピットより南側は削平により消滅している。床面全体についても同様のことがうかがえる。

中央ピット（２）は長辺85㎝、短辺50㎝、深さ22㎝を測り、平面形は不整隅丸長方形を示すものである。しかし、このピットに伴う柱は周辺にみあたらず、このピットは前述の建て替えに伴うところの中央ピットと考えるのが妥当と思われる。

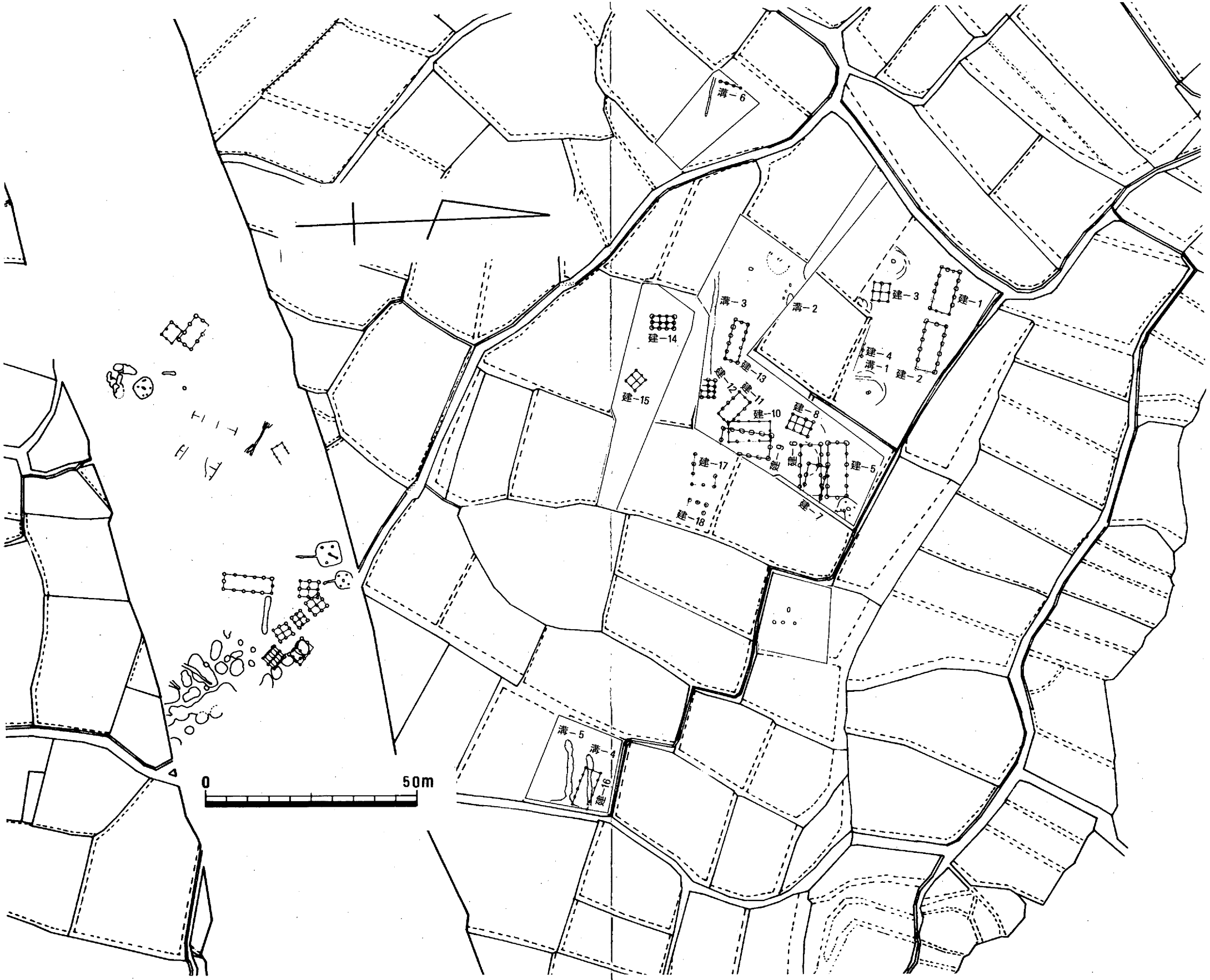
いずれにせよ、地形が削平を受けているため消滅していることにより正確な規模は把握することはできなかった。

さらにこの竪穴式住居の北西には続いて壁体溝、まばらな柱穴も確認することができたが、どの壁体溝に伴う柱穴であるかは確認するまでにはいたらなかった。

いずれにしても、このKⅣA という調査範囲内においては、数軒の竪穴式住居が作られていたということである。



第30図　竪穴式住居（1／120）



第31図　建物配置図（1／1,000）

7. 建　物

(1) 建物－1（第32図、図版9－1）

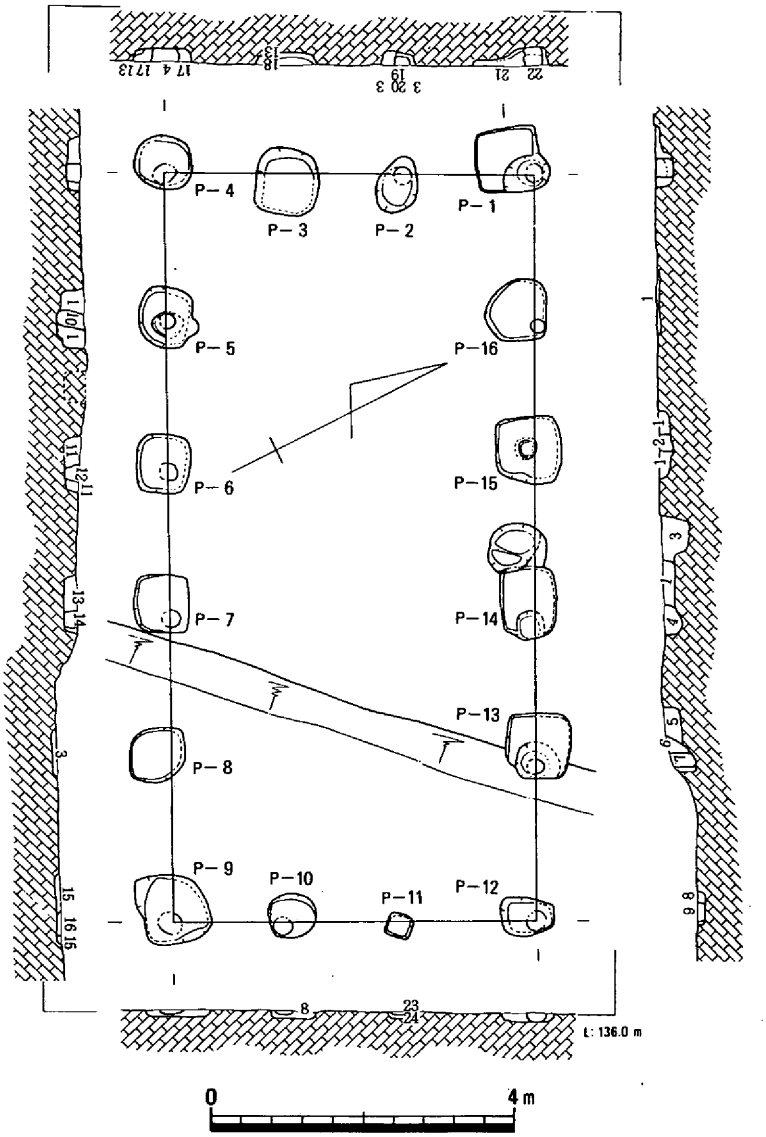
本遺跡でもっとも高所（海抜約136.5ｍ）に存在する掘立柱建物で、棟方向東西を示す（主軸N64° W）2×5間の側柱建物である。東側に存在する建物－2と同時期に並んで存在した建物と考えられる。柱掘方は基本的に隅丸方形あるいは方形プランを示すが、中には円形のものもありやや不揃いである。平面的にかなりの削平を受けているため、建物の東部分では約35㎝の落差がある。この低い部分、すなわち東梁行柱列では掘方の深さは、わずか8～10㎝を測る程度であるが、同一平面でも建物－2では、掘方の深さが約60㎝とかなり深く掘りこまれていることは特筆される。柱痕跡は、比較的明瞭に観察され、掘方埋土が灰褐色土・黄色土・淡灰色土のブロック混成土であるのに対し、暗灰色あるいは灰褐色土の単一土が埋積しており、径20～25㎝を測る。これらのうち3本の柱穴に遺存していた柱根の樹種はカヤであることが判明している。建物の構造としては、梁行部分が3間となっており、久米郡衙推定遺跡である久米町所在の宮尾遺跡で検出された建物－3に共通する特徴である（註）。西側・東側いずれの梁行も北側1間分が他の1間分より長く、約170㎝を測り、他は約155㎝を測る。桁行の柱間心々距離を測り、7尺弱を示している。掘方内からの出土遺物は極めて少なく、わずかな須恵器・土師器・鉄滓片が認められる。

（註）　岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告－(4)」（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査－2）1973年刊。

(2) 建物－2（第33図、図版9－2）

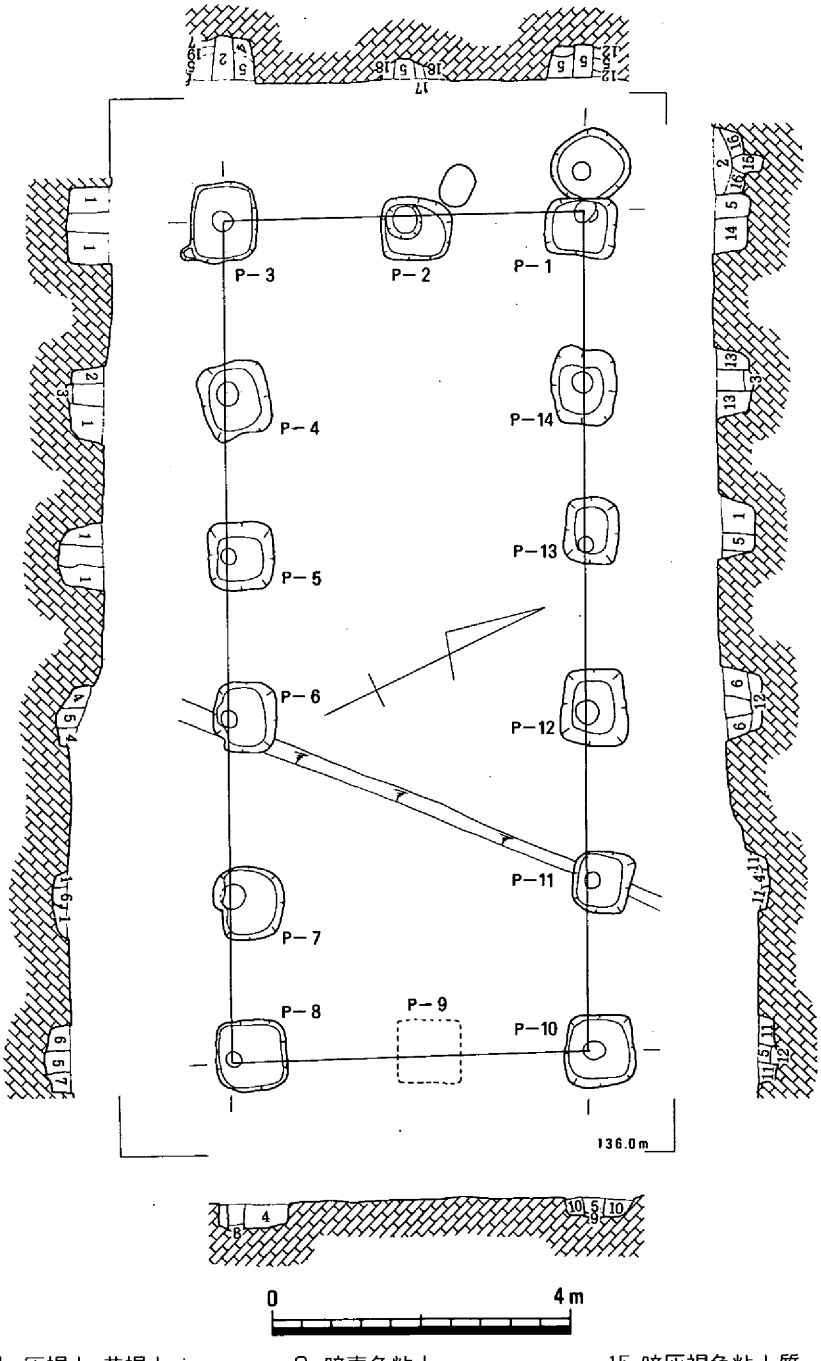
建物－1の東側梁行部分から約5.7ｍ東に、西側梁行部分が存在する。ほぼ同規模の2×5間の棟方向東西の側柱建物である。棟方向は、N65° Wを示し建物－1とほとんど同一企画を示す。梁行は約4.8ｍ、桁行は11ｍを測り、建物－1の前者が約4.85ｍ、桁行が10ｍという点で桁行がやや長い点が注目される。梁行は、建物－1のように変則的な3間を示すものと異なり、通常の2間を示す。柱掘方は建物－1に比べると、整然としており、1辺約90㎝を測る隅丸方形の掘方を示す。柱の規模は径約20㎝前後を測り、南側桁行列の2本の柱穴から柱根が遺存しており、樹種同定の結果、建物－1と同様、カヤであることが判明した。掘方内からの出土遺物には、須恵器片・土師器片のほかに鉄滓が認められる。建物－1と共に、この規模の建物は、本遺跡の、いわば標準的な規格を示している。類例としては、阿哲郡哲西町所在の二野（ふたの）遺跡で検出された建物群と共通する（註）。また、前述の宮尾遺跡でも1棟検出されており、長大な建物群の中でも、小規模な建物として存在する。

（註）　岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告－15」（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査－9）1977年刊。



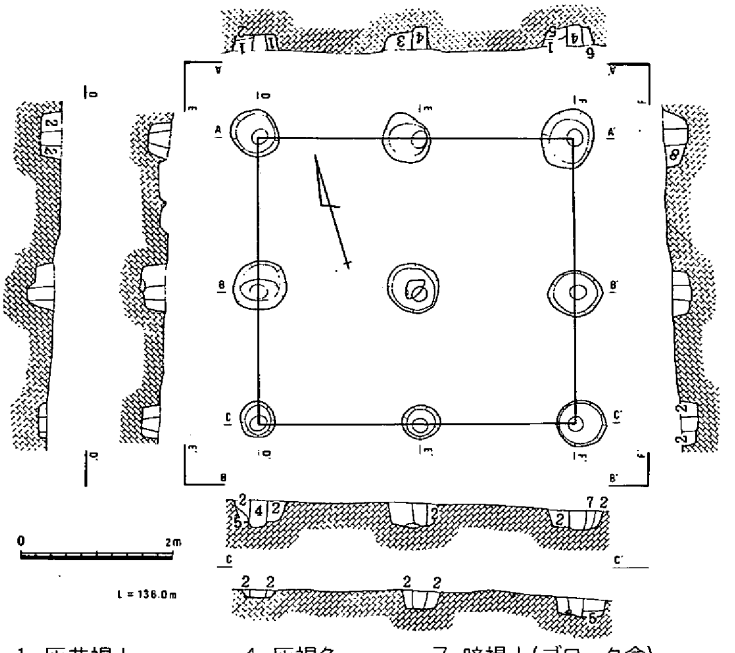
1. ブロック土
2. 灰黄褐色土
3. (黄色土、灰色土) ブロック土
4. 灰色土、黒褐色土、黄色土
5. 灰黄色粘質土
6. 灰色土、黒色土、石(小砂ブロック)
7. (灰色土、褐色土) ブロック
8. 橙茶褐色
9. 暗灰色土
10. 黒褐土(黄色土小ブロック含む)
11. 灰褐土、黄色土、灰色土
12. 暗褐色土
13. 黄褐色、黄色土ブロック土
14. 暗灰色土、灰褐土
15. 黄色土～橙黄色土
17. 灰褐色土(灰色強い)
17. 灰色土、黒褐色土
19. ブロック土(灰色土、暗褐土、黄色土)
19. ブロック土(灰色土、暗褐土、黄色土)
19. 白黄色土
20. 黒褐土、灰色土、ブロック土

第32図　KIA 建物－1 (1／100)



1. 灰褐土、黄褐土
2. 灰褐土
3. 灰青粘土
4. 黄褐色(下層は粘質)
5. 暗灰褐色
6. 暗灰黒褐土(下層は粘質)
7. ブロック土
8. 暗青色粘土
9. 黒青色粘土
10. 地山(黄橙色土、黄褐色土)
11. 黄褐色土、黄橙色土
12. 暗灰青色粘土
13. 灰褐土ブロック
14. 黄色土、黄褐土、ブロック土
15. 暗灰褐色粘土質
16. 褐黄土
17. 暗黄褐土
18. 橙黄色土ブロック土
19. 灰色粘土

第33図　KIA 建物－2 (1／100)



1. 灰黄褐土　　4. 灰褐色　　7. 暗褐土(ブロック含)
2. ブロック土　　5. 地山土　　8. 灰黄褐色、ブロック土
3. 暗灰色粘質土　　6. 淡灰褐色

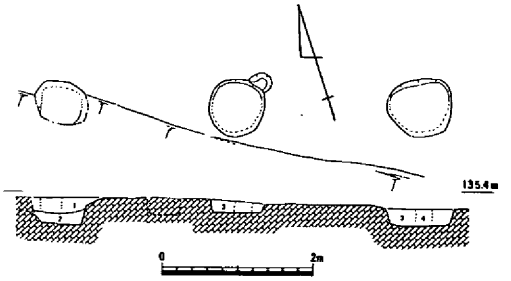
第34図　KIA 建物－3（1／100）

(3)　**建物－3**（第34図、図版11－1）

建物－1の南約20mに位置する、倉庫と推定される2×2間の総柱建物である。柱間心々距離は180cmあるいは210cmで、ほぼ6尺・7尺であるが、前者は、建物の南半の南北心々距離である。中心柱には礎板として34×20cmの扁平な礫を据えている。柱掘方はほぼ円形を示し、径45～75cmを測り、深さは浅いもので約8cm、深いもので約30cmを測る。柱痕跡は比較的明瞭に観察され、灰黄褐色を呈する土に黄色土の地山土がブロック状に含まれている。柱の径は、土層断面および平面の観察によると約20cmと推定される。

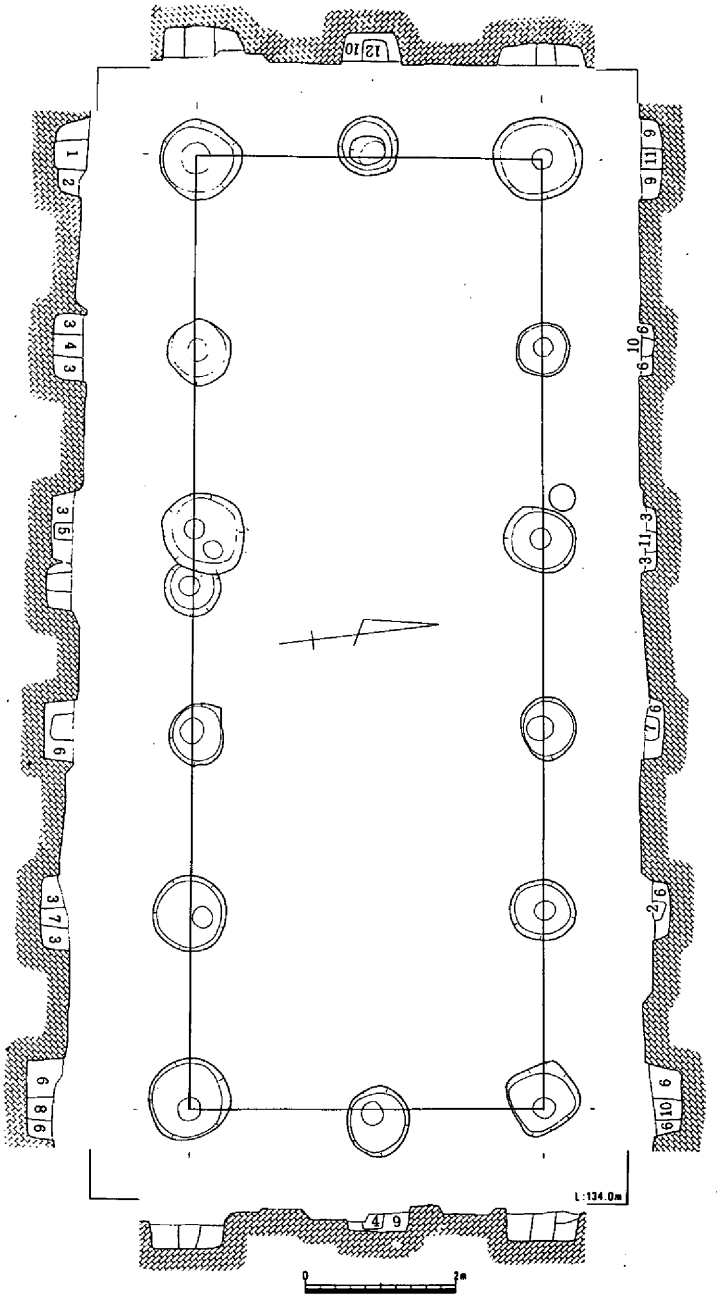
(4)　**建物－4**（第35図、図版11－2）

建物－2の南方13mに位置する、棟方向を南北とする側柱建物の梁行部分の2間分の柱穴を残す。いずれも暗褐色土と黄色土がブロック状となった土が埋められているが柱痕跡部分には黄色土ブロックがほとんどみられない。柱心々距離は240～250cmを測る。棟持柱の掘方はひとまわり規模が小さく、掘方も浅い。そのことから南北棟建物であることが推定されるが、この特徴は建物－2にも共通する。棟方向は、推定、約N17。Eを示す。



1. 暗灰褐土炭混じり　　3. ブロック土
2. 暗褐色土、黄色土、ブロック　　4. やや暗褐色土

第35図　KIB 建物－4（1／100）

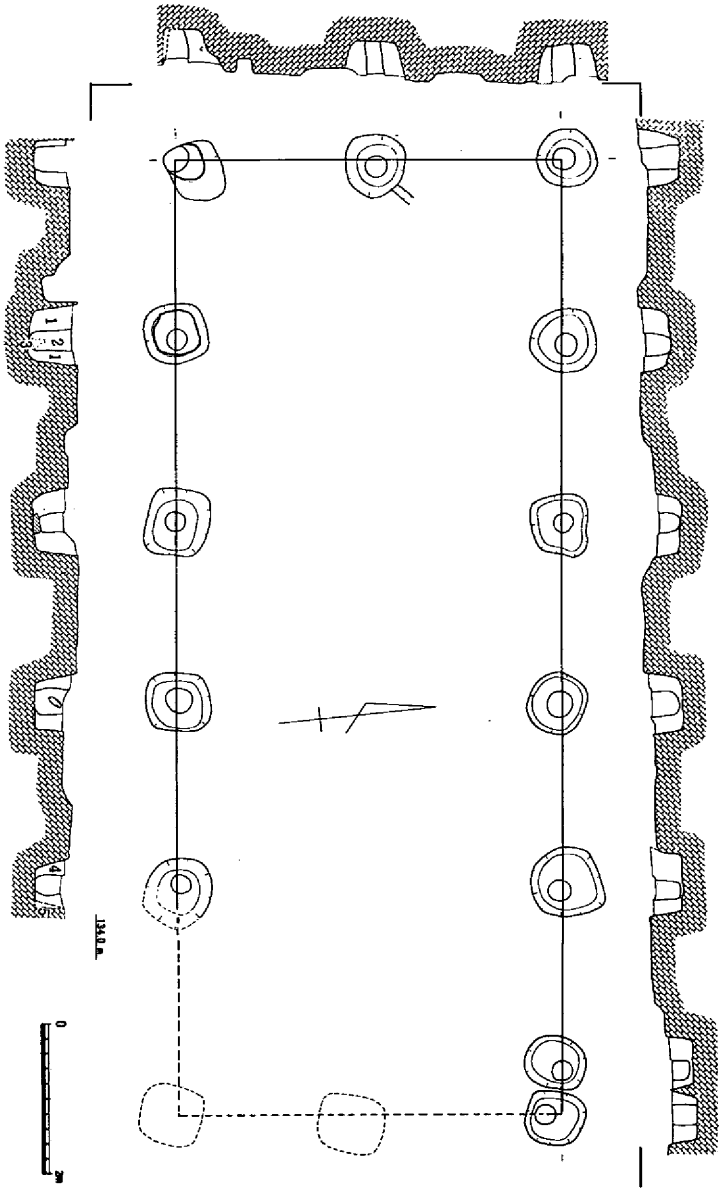


1. 暗褐色下層粘質
2. 褐色土
3. 黄褐色土(砂粒が多い)
4. 暗黄褐色土
5. 灰褐色粘質土
6. 暗黄褐色土(砂礫多量)
7. 暗褐色土(砂礫少量)
8. 褐色土(弱感粘質)
9. 黄褐色
10. 暗褐色
11. 暗褐色(弱感粘質)
12. 暗黒褐色土

第36図　KⅣA 建物－5（1／100）

(5)　建物－5（第36図、図版18）

KⅣA中央やや北上りに検出した梁行2間（460cm～470cm）×桁行5間（1265cm×1275cm）の掘立柱建物である。柱穴掘り方は径70cm～110cmのほぼ円形を基本とし、深さ15cm～50cmを測る。柱痕跡はすべての柱穴において確認されており、直径25cm～40cmを測るが、30cm前後の柱であったと推定される。梁行柱間寸法は230cm～240cmとやや差がみられるが、平均値で232cmとなり、7.7尺等間と考えられる。桁行柱間寸法は235cm～270cmと大差があるが、南側平均254cm、北側平均253cmを測り、両桁行間ともほぼ相対しており、8.4尺等間と考えられる。出土遺物は埋積土内より若干認められた。



1.暗黄茶褐色　3.黒灰色(粘質)　　5.暗黄淡茶褐色
2.黒暗茶褐色　4.黒茶褐色、暗黄淡褐色

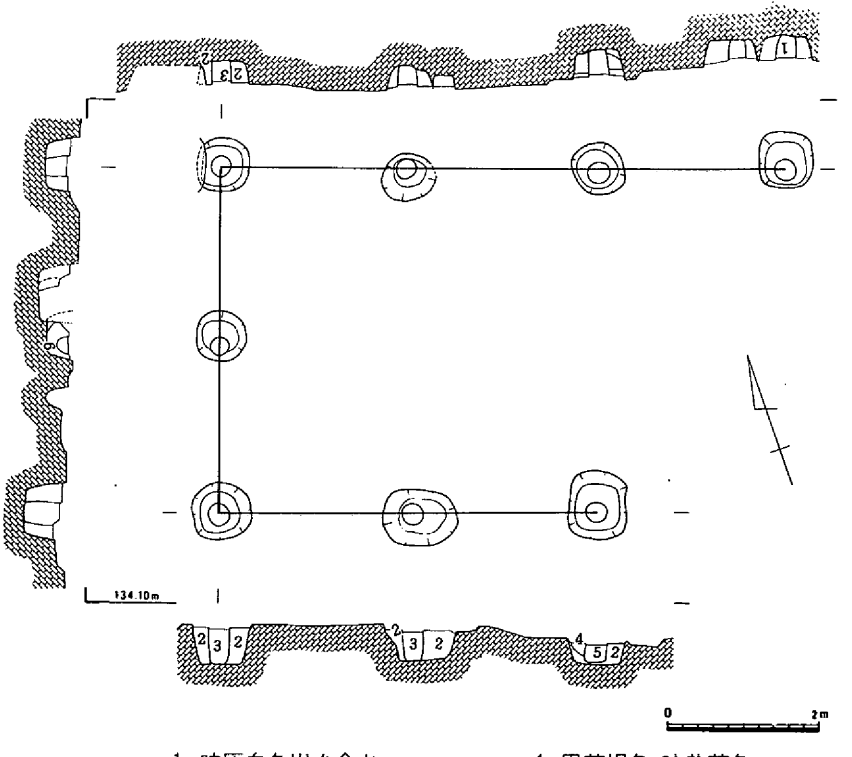
第37図　KIVA 建物－6　(1／100)

(6)　**建物－6**（第37図、図版18）

KⅣAほぼ中央南よりで検出した梁行2間（510cm～？）×桁行5間（1280cm～？）の掘立柱建物である。柱穴掘り方は径75cm～90cmのほぼ円形と、一辺75cm～80cmから80cm～90cmの胴張り隅丸方形のものまでで、隅丸方形が基本的であったのであろう。深さは45cm～55cmを測る。すべての柱穴で柱痕跡を認めており、直径は25cm～30cmを測り、柱本来の太さは30cm前後であったと思われる。南東隅の柱穴2本は調査範囲外であり、計測することは不可能であった。柱穴埋積土内よりの杯蓋（第45図71）が出土している。

(7)　**建物－7**（第38図、図版18－1）

建物－5・6の双方にかかって検出された梁行2間（460cm～？）×桁行5間（？）の掘立柱建物で前2棟に対し12。北にずれている。建築年代のちがいによるものである。柱穴掘り方は70cm×70cm～78cm×105cmの胴張り隅丸方形を基本とし、掘り方深さは40cm～50cmを測る。検出した柱穴すべてから柱痕跡を認めた。柱痕径は25cm～30cmを測り30cm前後の柱を用いていたものであろう。梁行柱間寸法は220cm～240cmと差はみられる。桁行も差がみられる。

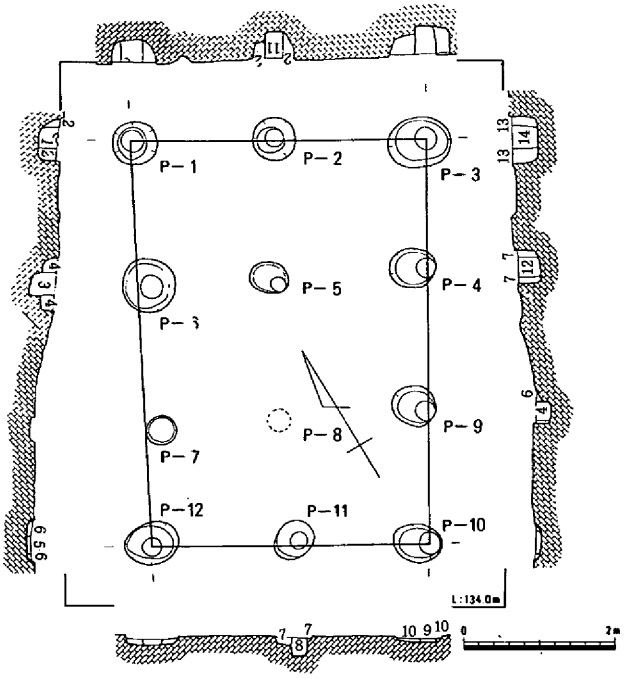


1. 暗灰白色炭を含む
2. 黒暗茶褐色、暗茶淡褐色
3. 黒暗茶褐色、暗黄淡褐色を含む
4. 黒茶褐色、暗黄茶色
5. 黒茶褐色
6. 暗黄淡茶褐色

第38図　KⅣA 建物－7（1／100）

(8)　**建物－8**（第39図、図版18・20）

KⅣA とⅣB にまたがって検出された梁行２間（370cm～395cm）×桁行３間（540cm）の総柱の掘立柱建物である。柱穴の深さは10cm～35cmを測り得た。柱間寸法は梁行がややふぞろいであるが、平均で6.3尺、桁行は６尺等間と考えられる。建物の方向は磁北に対しN－21°－Eである。P－1には須恵器杯蓋が落ち込んだ状態で検出された。



1. 暗褐色土
2. 黄褐色土
3. 褐灰色粘土質土
4. 褐色土
5. 灰色粘土
6. 黄褐色土
7. 暗黄褐色土
8. 暗褐色粘質土
9. 暗灰色粘土
10. 黄灰色土（地山クサレ石多量に含む）
11. 黒褐色粘土質
12. 暗黄褐色土
13. 黒褐色土
14. 暗褐色粘質土

第39図　KⅣA・B 建物－8（1／100）

(9)　**建物－9**（第40図、図版19・20）

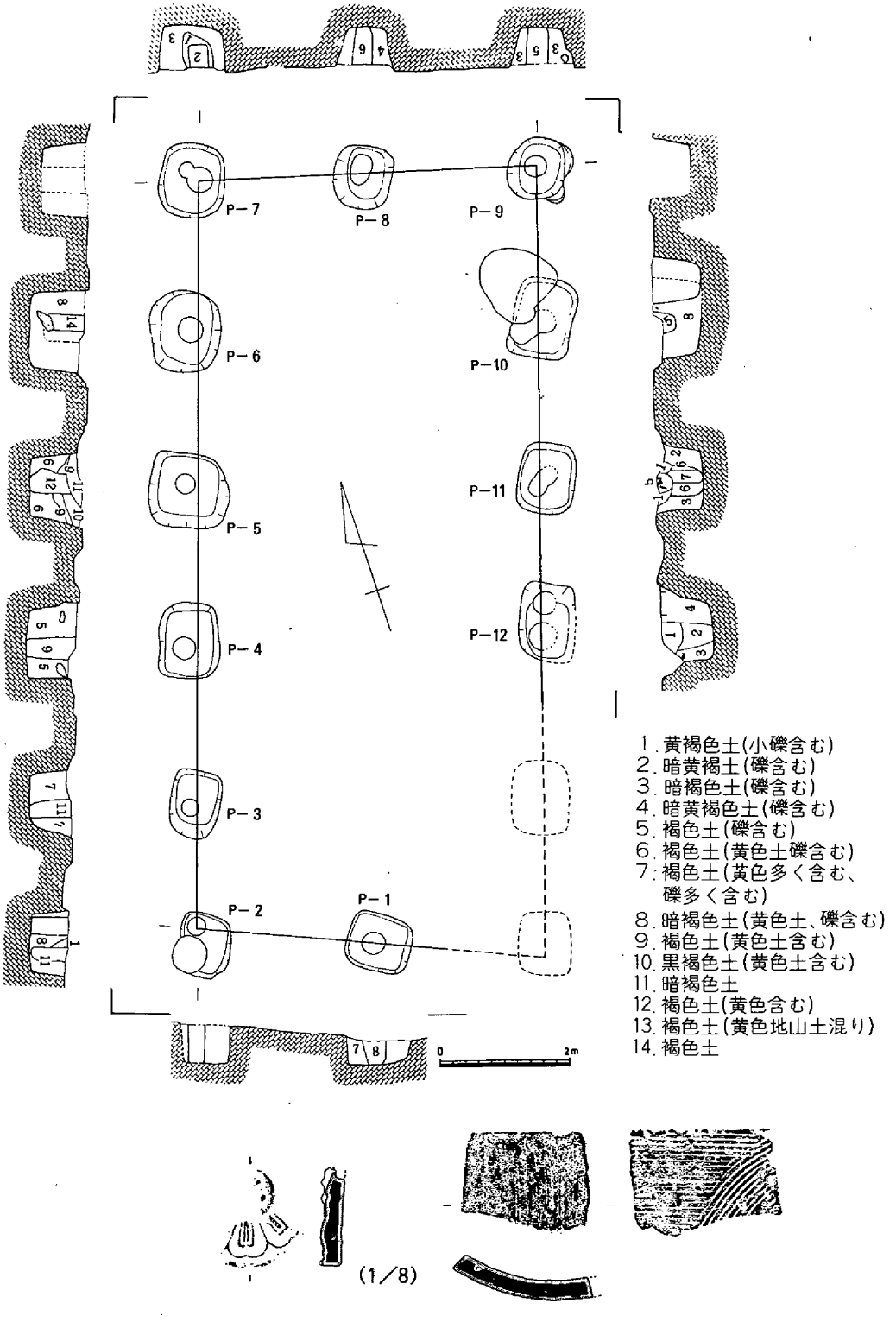
KⅣB 北東において検出された梁行２間（520cm×540cm）×桁行５間（1155cm×1220cm）の掘立柱の建物である。柱穴の掘り方は90cm×100cmの小型のものから90cm×120cmの大型のものまで多種多様であり、その形状は胴張りの隅丸方形から隅丸長方形を基本としているようであるが、ほぼ円形に近い掘り方を呈する柱穴も認められた。この建物の南西部の２柱穴が調査範囲外になり今回の調査では確認されなかった。確認された柱穴の深さは45cm～最深で90cmを測るもので、本遺跡内最大の建物である。梁行、桁行の柱間寸法はややふぞろいであるが、梁行柱間寸法の平均は530cm、桁行柱間寸法の平均は1188cmを測り、梁行7.9尺、桁行8 8尺等間と考えられる。

建物の方向は磁北に対しN－17°－Eである。P－11の柱穴内より軒丸瓦片が出土している。しかし、この瓦が建物に伴うかどうかは不明である。

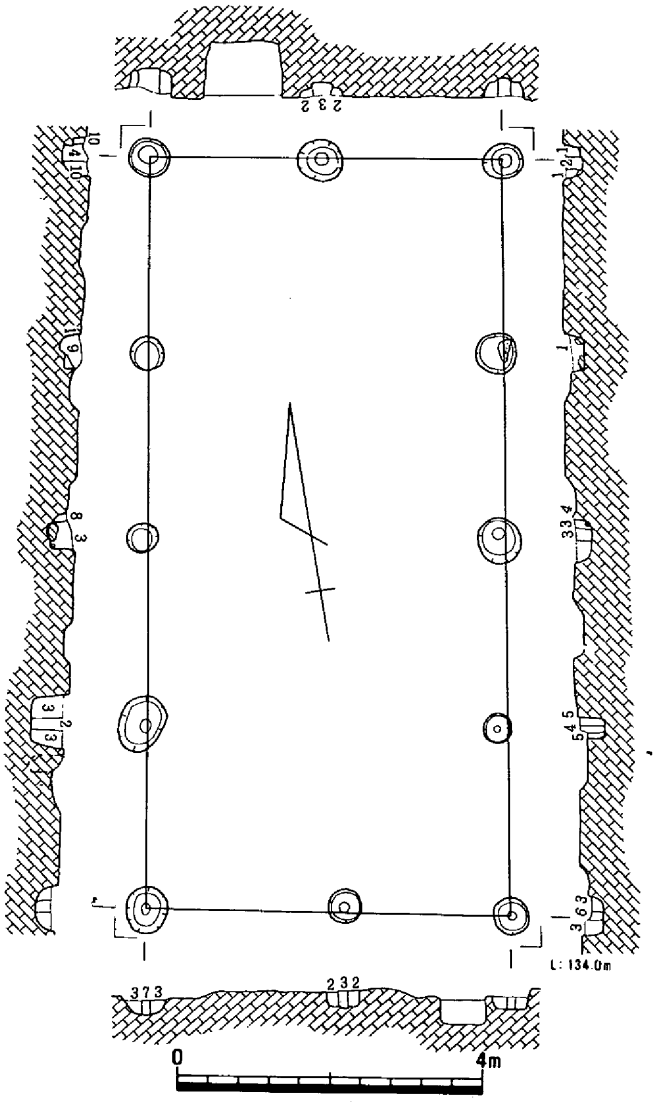
(10)　**建物－10**（第41図、図版19）

KⅣB で建物９に半分重複した形で検出された梁行柱間２間（465cm×485cm）×桁行柱間４間（995cm×1000cm）の掘立柱建物である。柱穴の掘り方は40cm～60cmを測るほぼ円形を基とし、若干楕円形のものも含まれている。柱穴の深さは最も浅いもので30cm、深いものでは50cmを測った。梁行・桁行柱間寸法はややふぞろいであるが、平均で梁行7.9尺、桁行8.3尺等間と考えられる。

建物の方向は磁北に対しN－9°－Eである。この建物－10はⅣA 調査区の建物－５・６に



第40図　KIV$_B$ 建物－9 (1／100)・出土遺物(1／8)



1. 暗黄褐色
2. 淡黒褐色土
3. 暗褐色土
4. 褐色土
5. 黒褐色(砂礫多量)
6. 褐灰色
7. 暗灰褐色土
8. 黄褐色土
9. 暗黄灰色土
10. 暗黒褐色

第41図　KⅣB 建物－10（1／100）

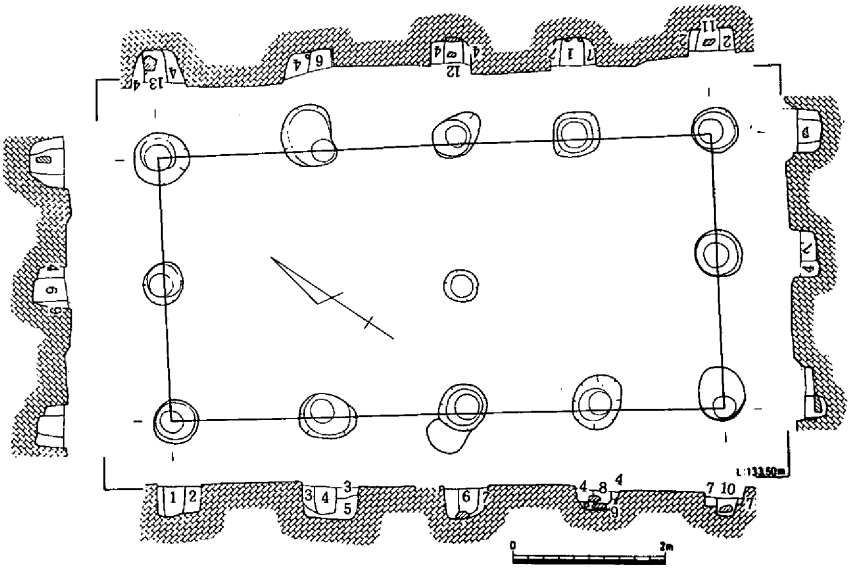
直交する形態を示している。この2間×4間の建物は建物－8と同様に穀物倉庫と考えるのが妥当な建物である。

(11)　建物－11（第42図、図版21）

KⅣB の中央やゝ南西よりで、建物－9に接近し、建物－10南西隅で重複している建物であり、梁行柱間2間（350cm～365cm）×桁行柱間4間（730cm×735cm）の掘立柱建物である。柱穴の掘り方はほぼ円形を基本としているようであり、柱穴径は55cm～75cmを測る。基本的には円形であろうが、平面形差で胴張り隅丸方形の掘り方の柱穴も確認されている。柱穴の深さは35cmも深いもので50cmを測った。梁行柱間寸法はふぞろいで南東側は5.2尺～7尺、北西側で5.5尺～6.2尺、桁行柱間寸法もふぞろいで北東側155cm～225cm→5.2尺～7.5尺、南西側160cm～200cm→5.33尺～6.66尺間である。建物の方向は磁北に対しN－53°－Wである。柱穴埋土中からは若干の土器片が出土している。

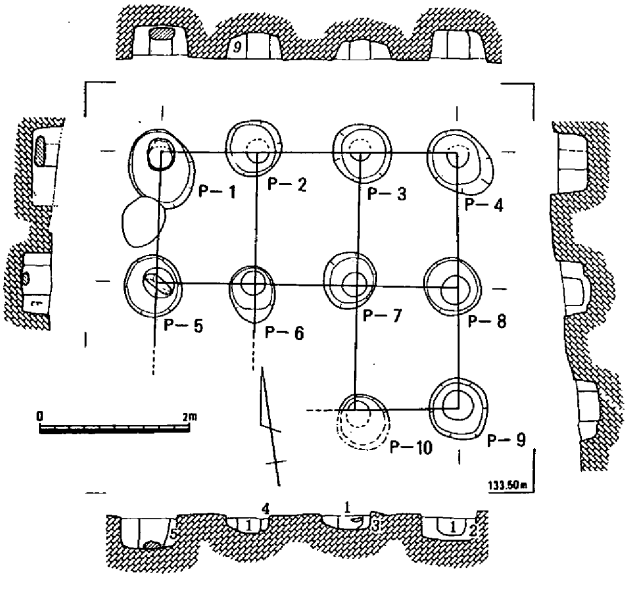
(12)　建物－12（第43図、図版21－2）

KⅣB 南西部でKⅤとの調査範囲外にかけての部分で検出された3間×数間の建物で、梁行柱間3間（395cm）×桁行柱間？間（検出時は2間まで）の総柱の掘立柱建物である。柱穴のり方は円形を基本としている。柱穴掘り方の径は60cm×70cm～85cm×110cmを測り、深さは20



1. 灰褐色土(下層粘質)
2. 暗灰褐色土
3. 褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土
6. 暗灰褐色土(下層粘質)
7. 黒褐色土
8. 暗灰色土
9. 暗黄灰色
10. 灰色粘質土
11. 褐灰色土(下層粘質)
12. 褐灰色粘質土
13. 灰褐色粘質土

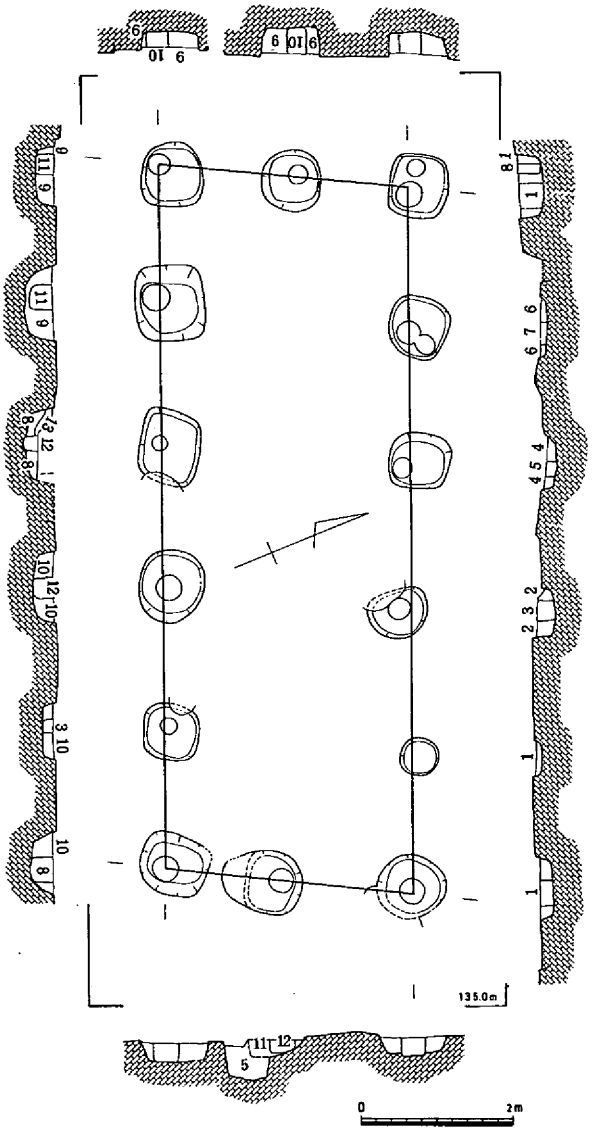
第42図　KIV$_B$ 建物－11（1／100）



1. 黄褐色
2. 黒褐色粘質土
3. 暗褐色(黄色土ブロック)
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土(底部に近い程黒っぽく粘度がたかい)

第43図　KIV$_B$ 建物－12（1／100）

cm～50cmで、P－1、5には礎石を用いていた。建物の梁行柱間は若干の差はあるが4.4尺、桁行柱間は東側で北から6尺、5.66尺、西側は5.66尺である。あらためて各柱穴間寸法は、P－1～2は4.33尺、P－2～3は4.5尺、P－3～4は4.33尺、P－5～6は4.33尺、P－6～7は4.5尺、P－7～8は4.66尺、P－9～10は4.5尺、P－1～5は5.66尺、P－4～8は6尺、P－8～10は5.66尺を測り得た。建物の方向は磁北に対しN－8°－Eである。



1. 黄褐色土　　7. 灰色粘質土
2. 淡黒褐色土　　8. 黒褐色
3. 暗灰褐色土　　9. 暗黄褐色土
4. 淡黄灰色土　　10. 暗褐色土
5. 暗灰色粘質土　　11. 暗褐色土(弱感粘質)
6. 黄灰色粘質土　　12. 褐色土

第44図　KⅢ・VIB 建物－13（1／100）

(13)　建物－13（第44図、図版16－2）

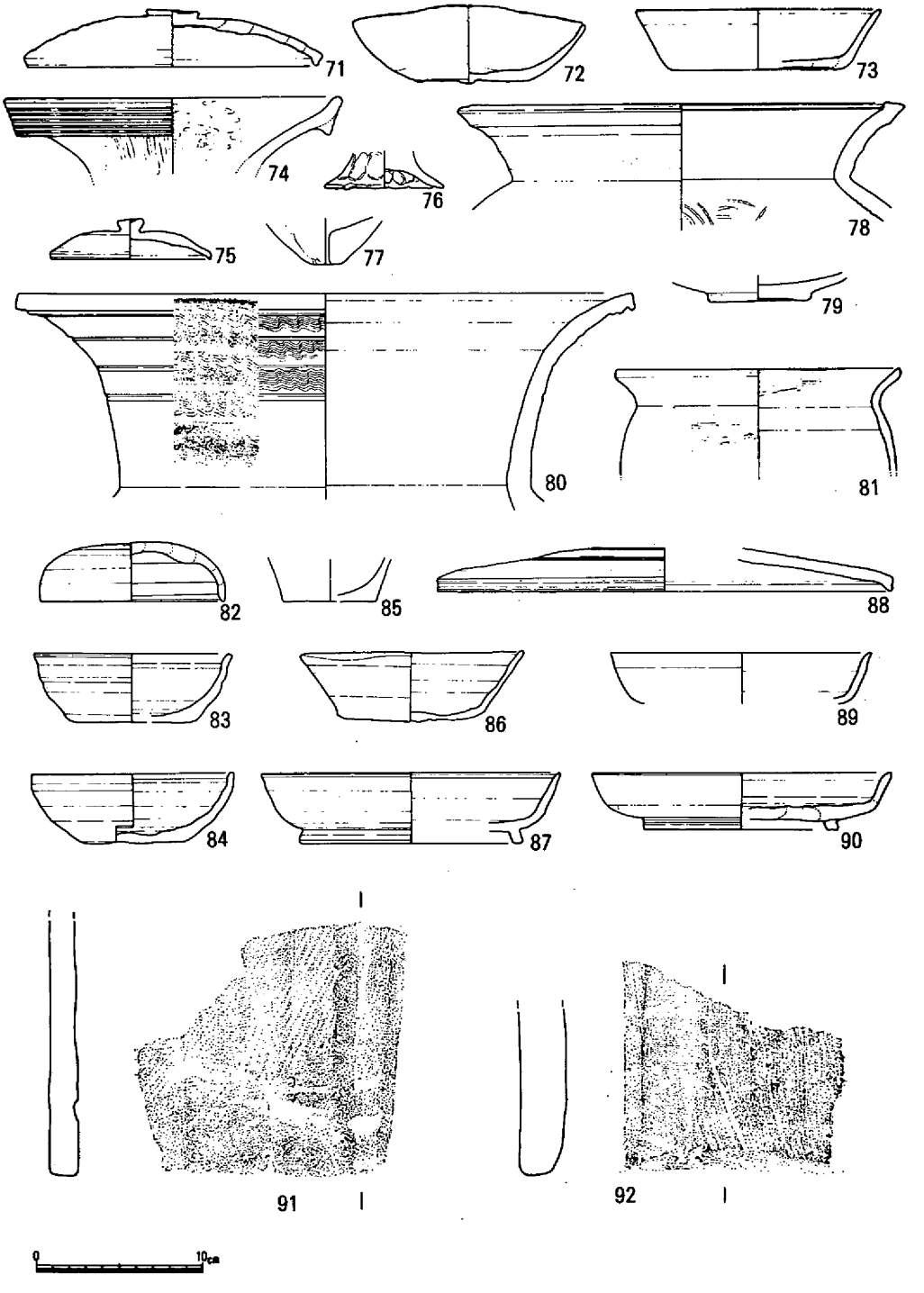
KⅢ・IVB の両調査区にまたがって検出された梁行柱間2間（330cm）×桁行柱間5間（940cm）の掘立柱建物である。柱穴の掘り方は、若干胴張りを呈する隅丸方形を基本としているものであろう。しかし数本は楕円形、もしくは円形に近い掘り方（平面形態）を示す柱穴もみうけられる。柱間寸法はふぞろいであるが、梁行寸法は東・西辺のも同じである。さらに桁行寸法にしても同様のことがいえる。

また、梁行は東辺で160cm～170cm→5.33尺→5.66尺、西辺は145cm～185cm→4.83尺～6.16尺であり、桁行の南辺は180cm～195cm→6尺～6.5尺、北辺でも同様の数値を得ることができた。柱穴の深さは20cm～最も深いもので45cmである。建物は磁北に対してN－29°－Wである。

建物－1・2と梁行は異なれど、方向は同じである。

溝－3（KIV～IVB）

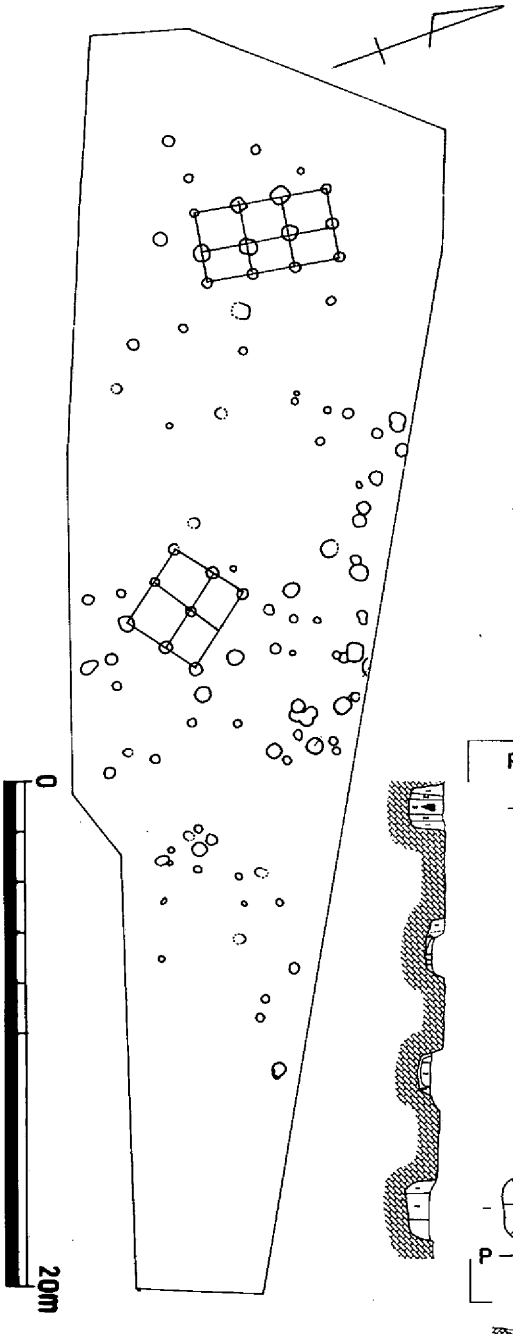
KⅢの南西端からKIVB 南西端で建物－12の西まで伸びるものである。Ⅲ区では明確に検出されたがIVB 区に入っては北辺部が確認されるのみである。これは削平によって消滅しているからである。溝は幅170cm～230cm、深さは約50cmを測る。奈良時代と推定される。



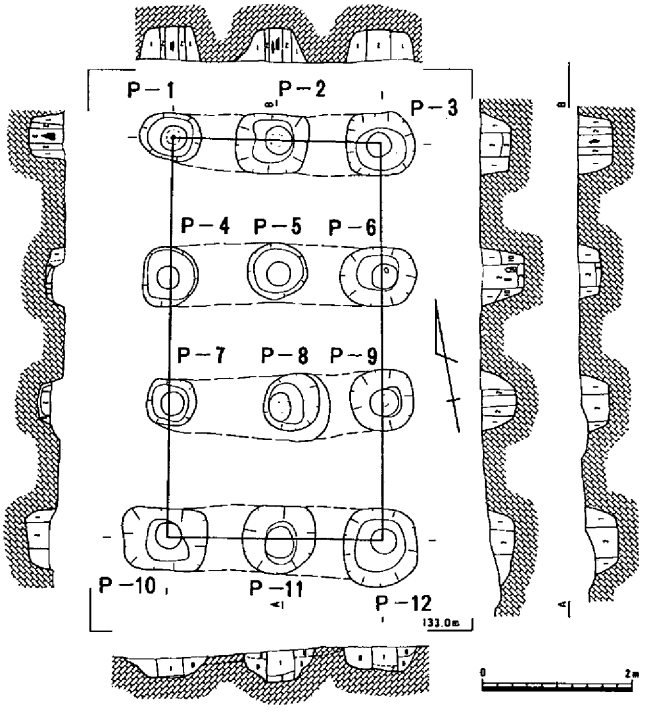
第45図　柱穴出土遺物（1）

8. KV区

KⅣの南側にあたり、東西に最長50ｍを測る台形状を呈した調査区である。この調査区は近世の削平がなされてはいるが、遺構の残りはまずまずであった。調査区の北西には２間×３間の総柱の建物、中央部分には２間×２間の総柱の建物、後者の北東には柱穴列（建物になるか）、その東には炭・灰を含んだ10cm前後の浅い窪みが認められた。この窪みは竪穴式住居となる可能性は考えられない窪みであった。建物以外にも柱穴は検出されているがまとまるものは存在していない。

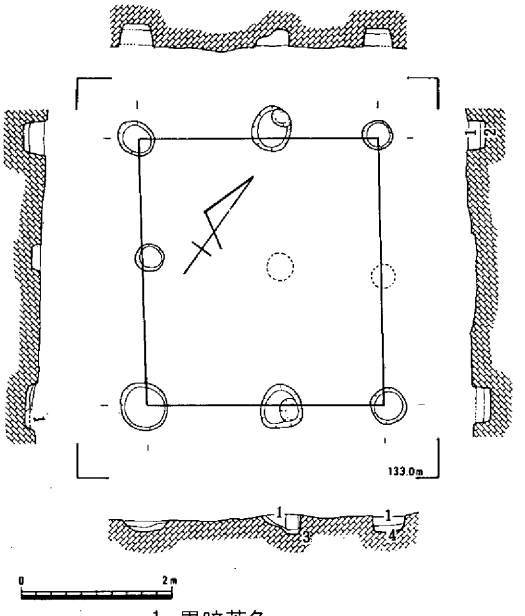


第46図　KV区遺構全体図（1／300）



1. 暗黄茶褐色
2. 黒茶褐色
3. 暗(黒)灰青色
4. 暗茶褐色
5. 白黄茶色
6. 暗茶褐色
暗茶褐色
7. 黒灰色
8. 暗黄茶色
白黄淡黄色
9. 黒暗茶褐色
10. 暗灰色茶色

第47図　KV　建物―14（1／100）



第48図　KV　建物－15（1／100）

(1)建物－14（第47図、図版22－2）

ＫＶ地区の北西部に位置する、ほぼ南北方向の２間×３間の建物で総柱のものである。いずれの柱穴も残りは良くて、最も深いものでは検出面から60cmを測ることができた。この建物は主軸を約9°東に振った形で建てられている。柱穴間の距離は、東辺が500cm、西辺が535cm、北辺が270cm、南辺が285cmの数値を得た。この数値から西辺と南辺が相対する辺に比べて若干広がりをみせている。

柱穴の掘り方は、まず最初東西方向の溝状の窪みを４本作り、次いで胴張りを呈す隅丸方形・歪な隅丸長方形の掘り方を示す穴を掘り上げている。柱穴12本のうち、ほぼ円形を示す柱穴は３本確認することができた。　柱の太さは確認された柱痕跡からいずれの柱も約30cmを測ることができた。さらにその中の柱穴においても、Ｐ－２・Ｐ－３・Ｐ－６では柱根を認めることができた。この柱の材質はヒノキかあるいはカヤの類であろう（鑑定は受けていない）。この総柱の建物は倉庫（穀物庫）であろう。

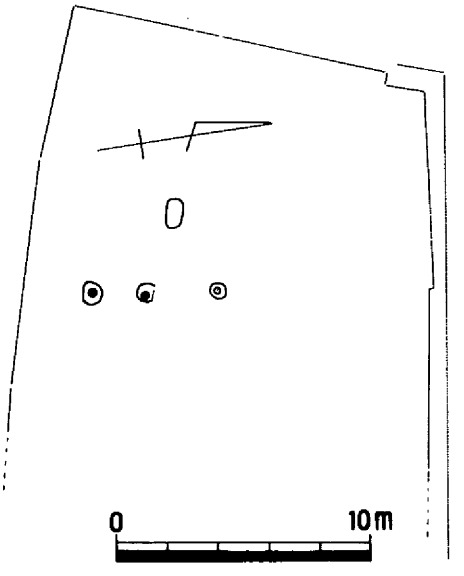
(2)　建物－15（第48図、図版22－３）

ＫＶのほゞ中央部に位置し、平面形がほぼ正方形を呈する２間×２間の建物である。調査中確認することができた柱穴は、周囲に８本（１本は痕跡のみ）と、中心の１本はわずかな窪みを残すのみで、計９本の柱穴よりなっている建物である。柱穴間は心心で計測すれば、北列・南列は320cmと同じであるが、東列・西列では東では365cm、西では355cmで東側がわずかに広い作り方である。

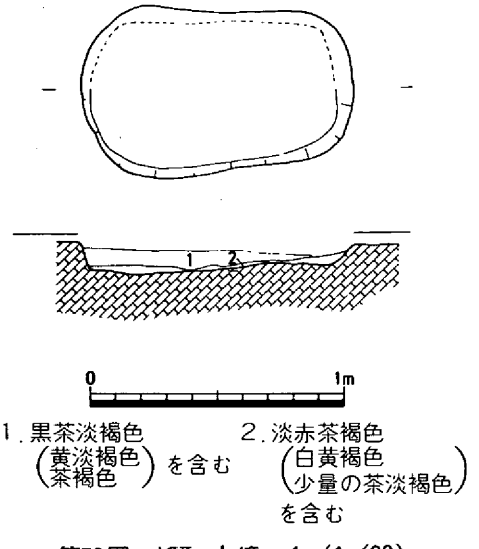
柱穴の掘り方は一定していないが、ほぼ円形が多く、径30cmから60cmを測る。検出した柱穴の掘り方の深さはまちまちで、痕跡だけのものから最も深いものでは30cmを測る。

建物の方向は磁北に対しN－51°30'－Wという数値を得た。

その他に、径60～70cmを測る柱穴列（２間×？間）が検出されているが調査範囲内では３本を確認したのみで、その他は範囲外（北東方向）にのびているものと思われる。



第49図　KVI区遺構全体図（1／300）



第50図　KVI　土壙－1（1／30）

9. KVI区

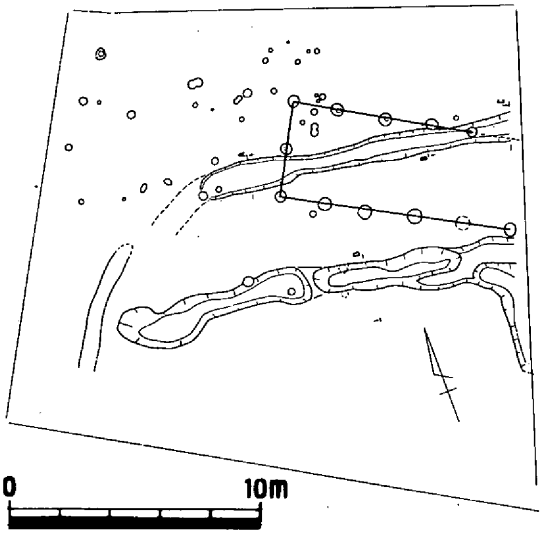
KIVA の東側に位置する調査地区である。面積は約330㎡あり、調査範囲内のほぼ中央付近より東にかけては約80㎝間隔で幅70㎝～100㎝の溝が検出された。溝は中央より西側は消滅している。これは西から東に向かって舌状に伸びていた丘陵を水田に変えるためにカットしたためである。それに伴って遺構も消滅しているものと思われ、現在確認されたものには、土壙1基・柱穴3本、それに近代の溝のみである

土壙内からは須恵器の小片がわずかに出土し、柱穴からは土師器の細片が見つかっているにすぎない。次に近世の溝について考えてみるならば、畑作（高麗人参）時に掘られた畝溝である。

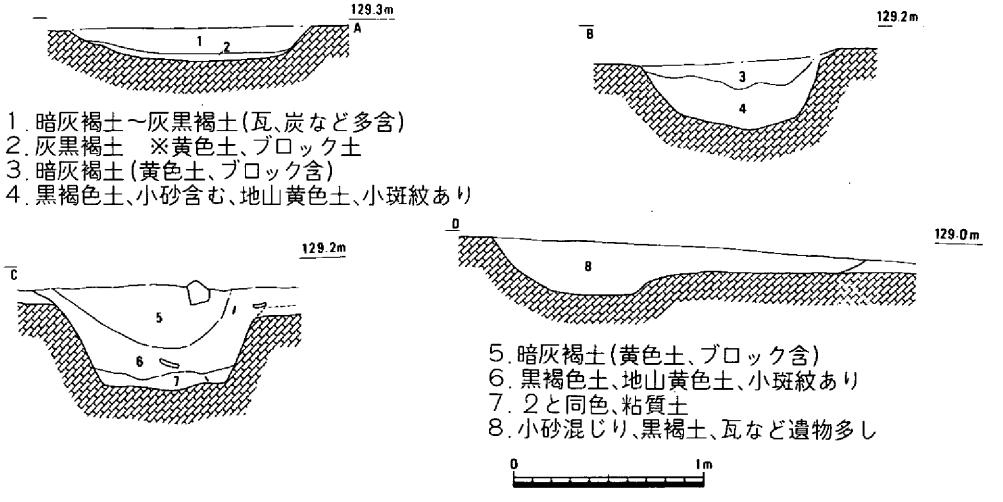
(1)　**土壙・柱穴列**（第49・50図、図版24）

土壙は中央やや南西よりに位置し、旧斜面に平行に存在していたものと思われる。規模は106㎝×66㎝、最深部で13㎝、時期は中世であろう。

南北方向に2間が現存するのみであるが、削平前は建物が存在していたと思われる。



第51図　KⅦ区遺構全体図（1／300）



第52図　KⅦ溝断面図(1／40)・遺物

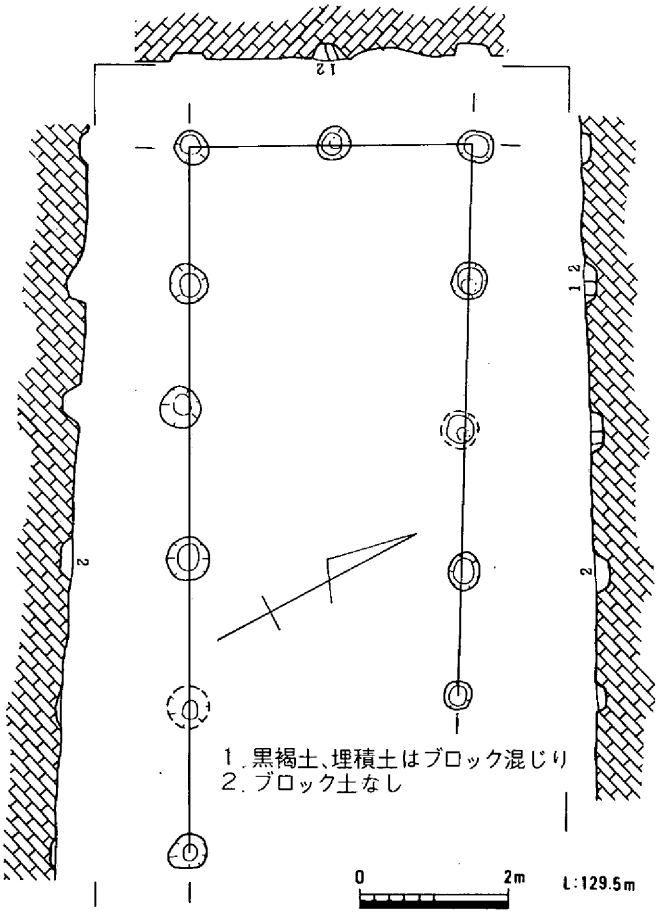
10. KⅦ区

(1) 溝－4・5（第49図、図版25）

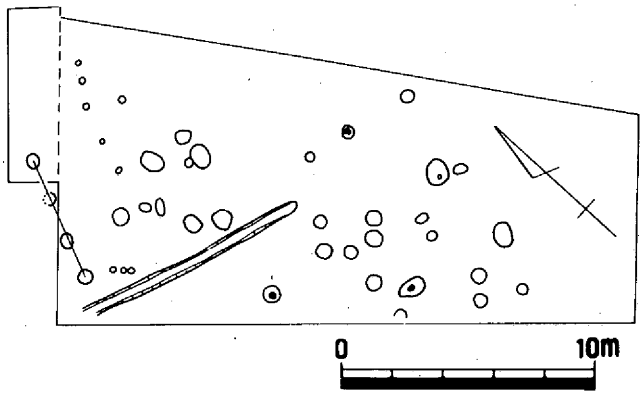
検出された全長13ｍ、幅70cm～120cm、深さ18cm～55cmを測る溝－４と、全長16.5ｍ、幅100cm～170cm、深さ15cm～28cmを測る溝－５の２本で、溝－４は西側で南に方向を変え、削平のため消滅している。断面形は台形状を呈し、炭・瓦を含む暗灰褐土～灰黒褐土で埋積している。溝－５は、４の南３ｍに位置し、ほぼ平行するが、調査区東端で南に曲がるものであり、埋積土内には瓦も含む、砂礫混じりの黒褐土で埋没している。溝からの出土遺物は第51図があり、奈良時代に比定されよう。

(2) 建物－16（第52図、図版25）

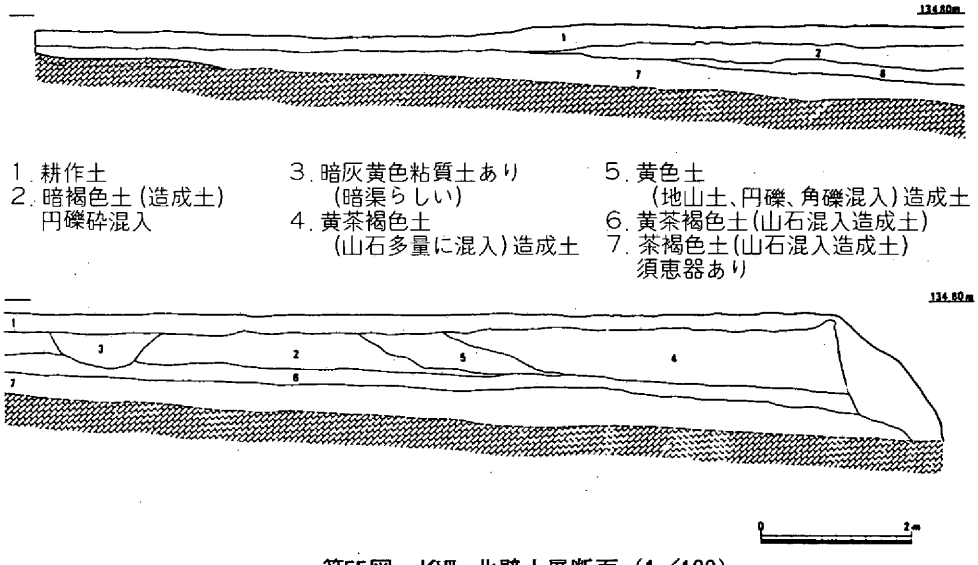
KⅦの北東隅近くに位置する建物であり、梁行、柱間２間（375cm）×桁行柱間５間（930cm、北側不明）の掘立柱建物である。時期は溝－４の後で、奈良末～平安初頭と考えられる。



第53図　KⅦ　建物－16（1／100）



第54図　KⅧ区遺構全体図（1／300）

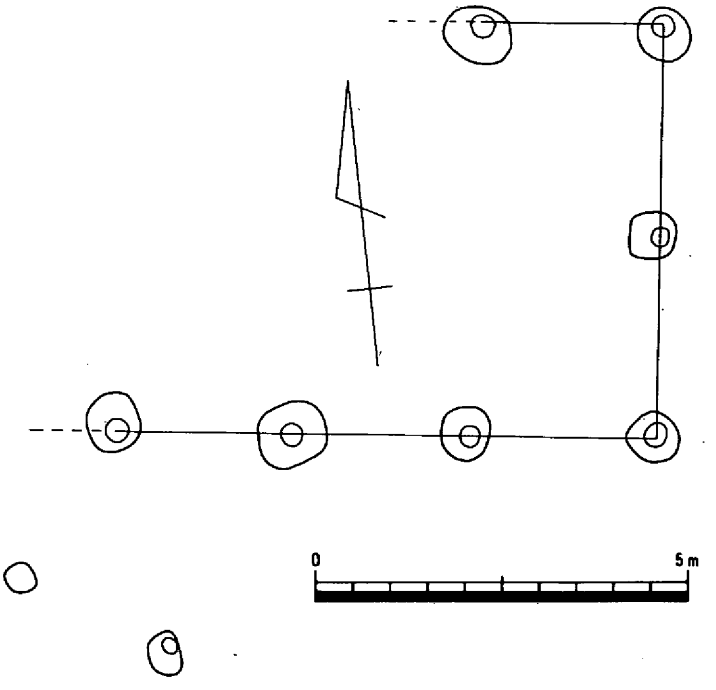


第55図　KⅧ　北壁土層断面（1／100）

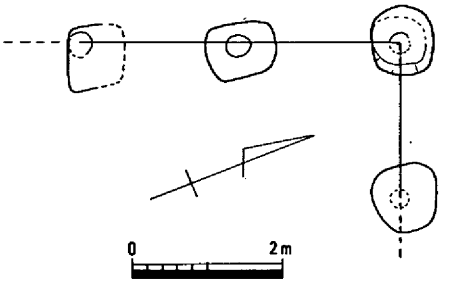
11. KⅧ区

KⅧ区は今回の調査範囲内では西端に位置する調査区である。調査の結果、旧地形は北西から南東に傾斜する地形を呈し、遺構は地山面で検出された。断面観察では土層は７層に区分されるが、いづれも水田造成土層である。遺物は溝内、水田造成土層から出土したが、いづれも８世紀代の須恵器である。

検出された遺構は北西から南東に流走する溝（幅約50cm、深さ約15cm）、南北方向の柱穴列、柱穴が多数検出された。柱穴列の北側部分は未発掘であるため断定できないが、地形的には柵列の可能性をもつ遺構と推察されるものである。柱穴列は３間（５ｍ）であるが、柱穴は等間でない。柱穴掘方は円形を呈し、深さは約20～23cmを測る。時期は不明である。



第56図　KIX　建物－17（1／100）等



第57図　KIX　建物－18（1／100）

12.　KIX区

この調査区はKⅣB 区のほぼ南東に位置する調査区である。遺構は第２層である水田造成土層直下の黄褐色地山土層面で検出された。

検出された遺構は柱穴のみであるが、２棟の掘立柱建物跡を確認することができた。

(1)　建物－17（第56図）

調査区の西にある３間（7.2ｍ）以上×２間（5.2ｍ）の東西棟建物である。西側は未発掘であり、桁行全長は不明である。柱間寸法は、桁行で2.4ｍ、梁行で2.6ｍ等間である。柱の掘方は60～90㎝で円形を呈する。柱痕跡は25～30㎝を測る。

(2)　建物－18（第57図）

建物17の東隣りに位置する。１間（2.1ｍ）以上×２間（4.2ｍ）の東西棟建物である。柱間寸法は桁行、梁行とも2.1ｍ等間である。柱穴掘方は80～100㎝で方形を呈する。柱痕跡は30㎝を測る。

第4章　ま　と　め

高本遺跡においては、古くは弥生時代から、近代にかけての遺構が重複して検出・確認された遺跡である。

まず弥生時代の遺構・遺物についてであるが、今回の調査で最も古いものは第24図の弥生時代中期の竪穴式住居であり、第8図21・27の同時代の壺片である。さらに竪穴式住居は調査区内の6箇所において確認され、上段（KI_A）に2群、下段（KI_B）で1群、さらに一段下段で2箇所、北東部は建て替えられている。南西部では数軒が重複し群をなしている。このように竪穴式住居は弥生時代～古墳時代初頭にかけての住居址で、古くから開けていた地域である。

次に歴史時代の遺構について、その性格として考えられるのは、集落址、寺院址、官衙址が考えられる。そこで高本遺跡の歴史時代の遺構について考えられる性格は、昭和47・48年の中国縦貫自動車道の調査で確認され、推定される官衙址について考えねばならない。

高本遺跡からの出土した歴史時代の遺物をみれば、須恵器、土師器、瓦、陶硯、鉄滓である。出土遺物のうち、須恵器、土師器については、ほとんどの遺跡に共通してみられるものである。1点ではあるが緑釉も確認されている。次に瓦であるが、これは寺院、官衙等に使用されていたものと考えられる。特に地方においての瓦の出土は、寺院址と考えるのが一般的であるが、官衙址も考えられる。本遺跡出土の瓦にしても磨滅が認められ、流入したものも多い。縦貫道での調査において多量に出土している硯は、今回の調査ではわずか1点を確認したにすぎない。また墨書土器に関すれば皆無である。

炉・鉄滓についてであるが、本遺跡からは炉（鍛冶炉？）1基、鉄滓は多量に検出されており、炉＝鉄滓と考えるのが妥当なようである。鉄滓堆積層中には須恵器（奈良時代相当）が混ざって出土している。上記の炉以外に焼土面（規模不明）も一箇所確認されている（鍛冶炉の下部構造と考えたい）。

高本遺跡で検出した歴史時代の遺構をまとめてみると、掘立柱建物遺構（以下「建物」とする。）18棟＋α（αについては柱穴が数本直列にならび建物か柱穴列か不明のもの）、炉1基・溝6本＋α・土壙である。検出された建物群には2間×5間の建物7棟＋α、2間×4間2棟、2間×3間2棟、2間×2間2棟、不明6棟である。この不明の中には2間×5間と考えられるものが4棟含まれていると推定される。

これらの建物の時期は奈良時代と考えることが伴出遺物等からうかがえる。
本遺跡で検出した建物で2間×5間あるいはそうであろうもの以外については倉庫と考えられる建物であろう。2間×5間の建物は郡衙に関係する建物と考えられ、正殿に付属する建物と考

えられる。この建物の長軸方向がいずれもほぼ東西と南北方向に向き整然と並んでいる。また他の建物は同標あるいは、まったく異った向きを示している。

今回検出した遺構（建物群）については、その全容（圃場整備地内）は把握できなかったにしてもその性格は、郡衙の中心となる政務をつかさどる正殿は確認されなかったものの、同地方は「和名抄」の英田郡閤武（えみ）郷に比定されるところである。さらに本遺跡から約200ｍ北東には閤武廃寺跡が確認されているほか、中国縦貫道建設に伴う調査で墨書須恵器「郡」等が出土し、極めて郡衙的な性格が強い。しかし本遺跡においては郡衙の中心地はつかめなかったが、検出された遺構等の規模・構造から推察して郡衙を構成する遺構の一部であろう。

建物番号	桁行×梁間	柱穴数	規　模	地　区	柱穴平面形態
1	2×5	16	9.5m×11.1m	KIA	方形～楕円形
2	2×5	14(2)	4.8m×11.1m	KIA ～KIB	方形～隅丸長方形
3	2×2	?	4.2m×3.8m	KIA	ほぼ円形
4	?	?	?	KIB	不整方形
5	2×5	14	4.7m×12.7m	KIVA	方形～ほぼ円形
6	2×5	14(2)	5.1m×12.7m	〃	方形～不整円形
7	2×5?	14(6)	4.6m×7.5m	〃	隅丸方形～不整円形
8	2×3	12(1)	3.8m×5.4m	KIVA ～KIVB	円形～楕円形
9	2×5	14(2)	5.2m×11.5m	KIVB	隅丸長方形～不整方形
10	2×4	12	4.7m×10.0m	〃	円形～楕円形
11	2×4	13	3.6m×7.3m	〃	円形～楕円形
12	3×?	?	?	〃	ほぼ円形
13	2×5	14	3.3m×9.4m	KIII～KIVB	方形～不整方形
14	2×3	12	2.8m×5.4m	KV	不整方形～不整円形
15	2×2	9(2)	3.2m×3.6m	〃	円形～不整円形
16	2×5?	14(2)	3.2m×9.4m	KVII	円形～楕円形
17	2×?	?	?	KIVA の下段の田	円形～不整方形
18	?	?	?	〃	方形～隅丸方形
19	?	?	?	KIVA	ほぼ円形

表－1　建物一覧表

図版 1

1.　遺跡遠景（南東山腹から）

2.　遺跡遠景（北東から）

図版2

1.　発掘調査前全景（北西丘陵上から）

2.　発掘調査後全景（北西丘陵上から）

図版3

1.　T－1（北東から）

2.　T－1内土壙（南西から）

3.　T－3（南々東から）

4.　T－8（南東から）

5.　T－6西壁（南東から）

6.　T－6北壁（南から）

7.　T－27（南々西から）

8.　KⅡ北壁（南西から）

図版4

1.　K IA 竪穴式住居第1群検出（東から）

2.　K IA 竪穴式住居第1群完掘（東から）

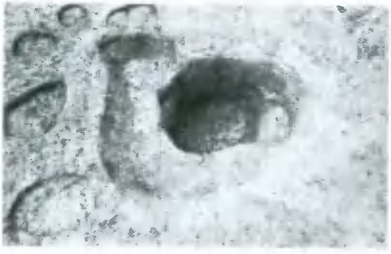
図版 5

1.　K I A 竪穴式住居第 2 群検出（北東から）

2.　K I A 竪穴式住居第 2 群完掘（南西から）

図版 6

1.　KIB 竪穴式住居第 3 群全景（東から）



2～5．KI 竪穴式住居群ピット

図版7

1. ＫＩ土壙－１断面（南東から）

2. ＫＩA土壙－２完掘（南から）

図版8

1.　K I A・B 全　　景（南東から）

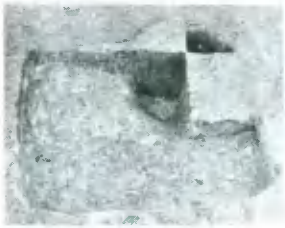
2.　K IA 建物－1・2全景（南から）

図版 9

1.　K I A 建物－1（南東から）

2.　K I A 建物－2（南から）

図版10



1.　建物1(P－1)

2.　建物1(P－2)

3.　建物1(P－3)

4.　建物1(P－4)

5.　建物1(P－7)

6.　建物1(P－8)

7.　建物1(P－9)

8.　建物1(P－10)

9.　建物1(P－11)

10. 建物1(P－12)

11. 建物1(P－13)

12. 建物1(P－14)

KⅠA 建物－1柱穴断面

図版11

1.　K IA 建物－3（北から）

2.　K IB 建物－4（東から）

図版12

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

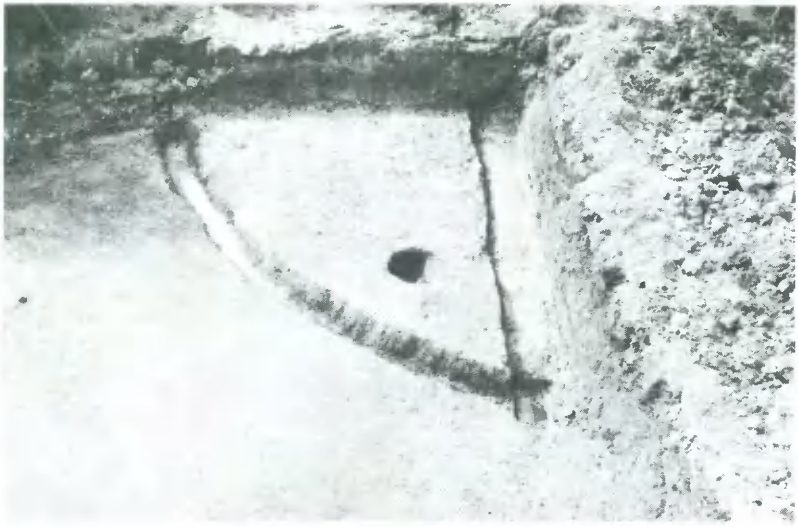
15

1. 建物２（P.1）
2. 建物２（P.2）
3. 建物２（P.3）
4. 建物２（P.4）
5. 建物２（P.5）
6. 建物２（P.6）
7. 建物２（P.7）
8. 建物３（P.8）
9. 建物２（P.10）
10. 建物２（P.11）
11. 建物２（P.12）
12. 建物２（P.13）
13. 建物２（P.14）
14. 建物３（中央柱穴）
15. 建物３（東側南北列中央）
16. 建物３（西側南北列中央）

16

K IA 建物－２・３柱穴断面

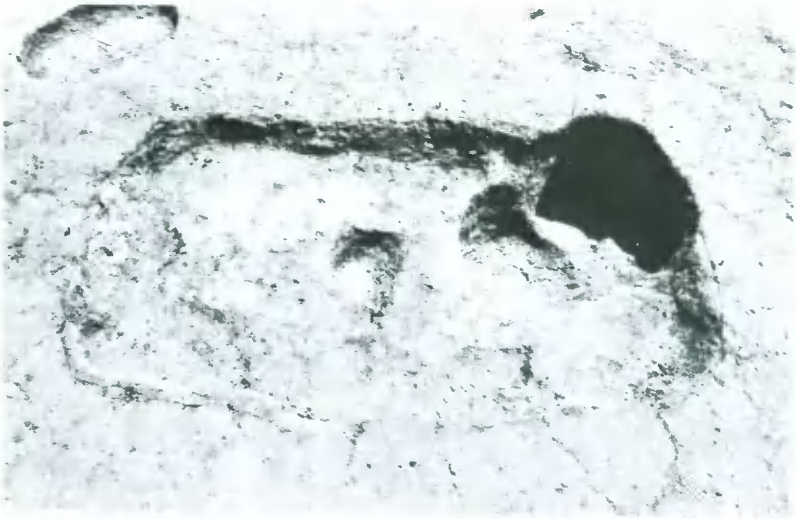
図版13



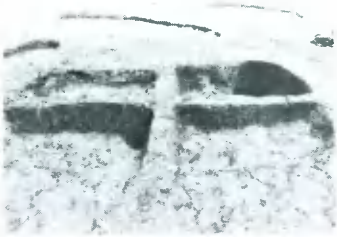
1.　KⅢ竪穴式住居（南東から）

2.　KⅢ　溝－3（北西から）

図版14



1．炉



2

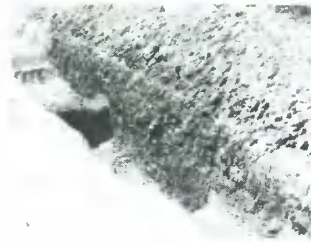
4

2・3　埋土断面　3

4・5　焼土断面　5

図版15

1



2

3

4

5

6

KⅢ土壙北西壁断面

図版16

1．KⅢ・ⅣB不明土壙検出状況（南西から）

2．建物－13・不明土壙掘り上げ後（南から）

図版17

1.　KⅣA竪穴式住居（北西から）

2.　KⅣA竪穴式住居・ⅣB建物－9（北から）

図版18

1.　KⅣA•B 建物－５～11全景（北から）

2.　KⅣA•B 建物－５～11全景（南西から）

図版19

1.　KⅣB建物－9（南西から）

2.　KⅣB建物－9・10（南西から）

図版20

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

1. 建物6(P.1)
2. 建物6(P.2)
3. 建物6(P.3)
4. 建物8(P.1)
5. 建物9(P.1)
6. 建物9(P.2)
7. 建物9(P.3)
8. 建物9(P.4)
9. 建物9(P.5)
10. 建物9(P.6)
11. 建物9(P.7)
12. 建物9(P.8)
13. 建物9(P.9)
14. 建物9(P.10)
15. 建物9(P.11)
16. 建物9(P.12)
17. 建物9(P.12)
出土遺物近影

17

KⅣB 建物－6・8・9柱穴断面

図版21

1.　KⅣB 建物－11（南西から）

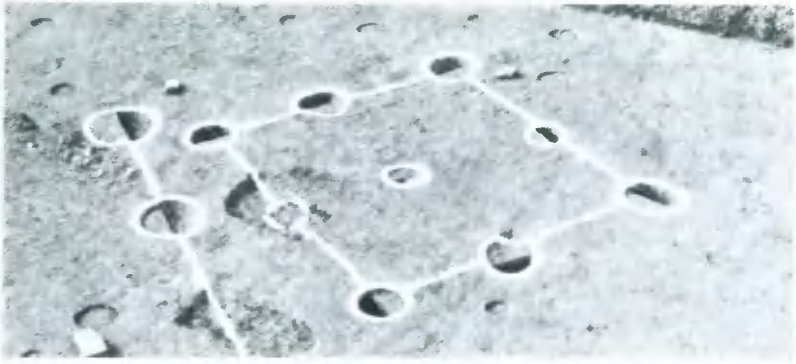
2.　KⅣB 建物－12（南から）

3.　KⅢ・ⅣA•B 建物全景（南西から）

図版22

1. ＫＶ全　　景（北西から）

2. ＫＶ建物－14（北西から）



3. ＫＶ建物－15（北から）

図版23

1

2

3

4

1. 建物14（P.1）
2. 建物14（P.2）
3. 建物14（P.3）
4. 建物14（P.4）
5. 建物14（P.6）
6. 建物14（P.7）
7. 建物14（P.8）
8. 建物14（P.9）
9. 建物14（P.10）
10. 建物14（P.11）
11. 建物14（P.12）

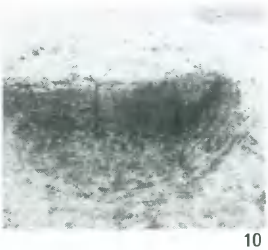
5

6

7

8

9


10

11

ＫＶ建物－14柱穴断面

図版24

1. ＫＶＩ全　　景（北西から）

2. ＫＶＩ土壙半掘（南西から）

図版25

1．KⅤⅡ全　　景（南西から）

2．建物－16全　　景（北西から）

図版26

竪穴式住居第３群・ＫⅢトレンチ・建物柱穴　柱穴　表採出土遺物

図版27

KⅦ溝　T－27・表採遺物

図版28

T－8　T　16(1)・T－18出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　61

高　本　遺　跡

昭和60年３月15日印刷
昭和60年３月30日発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　　刷　柳本印刷株式会社